大阪府四條畷市、第 96 代後醍醐天皇、楠木正行公と四條畷神社

–南北朝時代、四條畷の戦い、測定値解析、由来の四ヶ国語(日英韓中)用語–

古谷　昭雄*・沢　勲**・中岡愛彦***・肥塚　義明**

(大阪青山大学*・洞窟環境 NET 学会**・読売新聞 OB***)

History of Kusunoki Masatura and its Shijonawate Shrine, The 96th Emperor Godaigo of Nanboku-chō Period Shijonawate-Shi, OSAKA

—Nanboku-chō Period, Battle of Shijōnawate, Measurements Analysis, Multilingual Translation in Japanese-English-Korean-Chinese of History—

Akio FURUTANI*・Isao SAWA**・Naruhiko NAKAOKA***・Yoshiaki KOEZUKA**

ABSTRACT

The Lord of Kusunoki-Masatura (1326?-1348) which was worshipped gods became Kenbiishi and Saemonnojou in Chakunan of the Lord of Kusunoki-Masashige (1294?-1336) and served as Kawatimori (Kani). Kusunoki-Masatura played an active part after death of father as "Nanchou-no-shou". 1348, Kusunoki-Masatura was killed by a fierce battle with the Ashikaga army in the land of shijounawate. Father of Kusunoki-Masashige-Lord will strike to kick-off, has been kick-off to tell goodbye at 11 years of age of the child is a Kusunoki-Masatura-Lord and Sakurai Station (now Mishima-gun Shimamoto-cho). Child (Shounan-kou) which followed teachings of father (Dainan-kou) persuaded in "parting of Sakurai Station" firmly played a key role of the Nanchou and young the 97th Emperor Gomurakami (1339-1368) was protected and was fought for justice.

It is a child (Shounan-kou often tore an enemy by the aggressive tactics. 1347, Shounan-kou, in the battle of the current (Uriwarinishi, Hirano-ku, Osaka), was hit several times the enemy. Shounan-kouh fought against 80,000 big armies which Kou-No-Moronao and Moroyasu led with 3,000 soldiers in Shijonawate and, after a fierce battle, was defeated. Kusunoki-Masatoki and Kusunoki-Masatura brother for that have been suicide, die in battle (23 years old) who Sashichigae. Ashikaga Takauji was surprised at defeat of degrees and let 80,000 big armies face a commander-in-chief in confidential Kou-no-Moronao and Moroyasu. The Lord of Kusunoki-Masatura prepared for death for this fight and visited the temporary palace of Yoshino and expressed it in The 96th Emperor Godaigo (1339-1368).

Fight from seeing the emperor of your face at the end of memories. Keio 4 (1868) years, kawachi · Shijōnawate-city of Sumiyoshi-Hirata-Zinja of Kannushi et al and started Kusunoki-Masatura, had asked permission of the founding of the shrine which enshrined the spirits of Junji in Wada-Kenshuu et al., "Battle of Shijōnawate". In Meiji 22(1889) year, Shijonawate Shrine was estimated as shrine foundation than Governor of Osaka Prefecture, and it was done line case by "Bekkakukanpeisha". Furthermore, Shinto shrine foundation and a firm's name of "Shijonawate Shrine" were given than the Emperor Meiji and were done line case in Bekkakukanpeisha.

Shrine was enshrined in 1890. Architectural style: Nagare-zukuri. Foundation Era: 1890.　Foundation Era: 1924. Massha is Kusunokiten Shrine and Agen-Shoukonsha. Shinmei torii (1990) age are nuki3.91m, kasagi4.77m. The number of the stone tourou is eight engines. It is 1890 through 1925 in the erection generation of the stone tourou. Osaka Prefecture natural monument is a Kusunoki of Kusunoki-Masatura tomb. A historic spot of Osaka is biography Wada-Kenshuu grave and biography Kusunoki-Masatura grave.

キーワード:桜井の別れ、南北朝時代、四條畷の戦い、赤十字精神

Keywords: Sakurai farewell, Nanboku-chō Period, Battle of Shijōnawate, Red Cross Spirit

[洞窟環境 NET 学会　紀要6号][Cave Environmental NET Society(CENS), Vol.7(2016)　-　pp]

目次

1. はじめに
2. 四條畷神社の資料
2-1.南北朝時代の後醍醐天皇と楠木正成　2-2.南北朝時代の楠木正成と楠木正行
2-3.桜井の別れ　2-4.賢母の教え　2-5.赤十字精神　2-6.小楠公御墓所　2-7.和田賢秀殉節地
3. 四條畷神社の由来と現在
3-1.四條畷神社の和文由来と現在　3-2.四條畷神社の英文由来と現在
3-3.四條畷神社の韓文由来と現在　3-4.四條畷神社の中文由来と現在
4. 四條畷神社の社殿と神木
4-1.四條畷神社の社殿と本殿規模　4-2.四條畷神社の拝殿規模
4-3.四條畷神社の摂社・御妣神社　4-4.四條畷神社の末社
5.四條畷神社の鳥居測量と写真と数値解析
5-1.四條畷神社の鳥居の写真　5-2.四條畷神社の鳥居の測量値
6.四條畷神社の石灯籠と考察
7.おわりに
7-1.南北朝時代の楠正成・大楠公(ﾀﾞｲﾅﾝｺｳ)　7-2.南北朝時代の権力　7-3.四條畷神社の経緯度の考察

謝辞　参考文献
別表.四條畷神社年代順の内容

1. はじめに

本研究は、地域の歴史を明らかにして、文化遺産学の資料を作成することを目的としている。本稿は、大阪府八尾市、古代河内国の物部氏地域である四條畷神社で行った洞窟環境 NET 学会の総合学術調査(2013)報告の一部である。

四條畷神社の鎮座地は、〒575－0021大阪府四條畷市南野二丁目 18 番 1 号である。緯度は、北緯 34 度 43 分 57 秒と東経 135 度 38 分 57 秒で、標高は 61m である。四條畷神社の概要は、次のとおりである。

①主祭神は楠木正行(ｸｽﾉｷｰﾏｻﾂﾗｺｳ)(別称:小楠公)、贈従二位　楠木正行卿である。②神社創建は、明治 23(1890)年である。③神社の社格は、別格官幣社・別表神社。④祭神は、楠木一族の将士 24 柱を配祀。①楠木正時、②楠木正家、③楠木正家子息、④和田賢秀、⑤和田正朝等である。⑤例祭は、2 月 12 日、殉節祭 1 月 5 日、春大祭 4 月 5 日、秋大祭 10 月 5 日。⑥巡拝等は、建武中興十五社の一社　なにわ七幸めぐり　神仏霊場 61 番。

⑦本殿は、流れ造り、明治 23(1890)年に創建した。⑧境内:摂社は、御姚(みおや)神社で、流れ造り、大正 13(1924)年に創建年代した。末社は有源招魂社である。⑨鳥居:一の鳥居は平成2(1990)年に建立した神明系である。二の鳥居は昭和 12(1937)年に建立した明神系である。三の鳥居は明治 25(1892)年に建立した明神系である。⑩灯籠:石灯籠数は 8 基で、1890年～1925年に建立した。

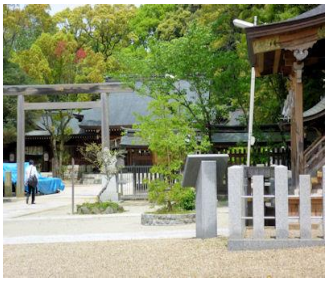


写真 1-1.四條畷神社の全景の鳥居は旧伊勢神宮

写真 1-2.四條畷神社石碑

写真 1-3.神社の階段は健康

写真 1-4.なにわ7幸めぐり(7 社寺を巡拝)

写真 1-5.神社にあるユニークな社務所

写真 1-1 は四條畷神社の全景。**写真 1-2** は四條畷神社の石柱。**写真 1-3 は**四條畷神社の階段である。**写真**

1-4 は「なにわ7幸めぐり」である。**写真 1-5.**四條畷神社のユニークな社務所である。**写真 1-6** は神社の測量と調査班と神社関係者である。

著者は、そうした歴史背景を抑えつつ四條畷神社の社殿・拝殿、鳥居、石灯籠の詳細なデータ解析を行った。さらに文献等によって神社及び周辺の歴史、伝承地の由来についても調査研究を行った。本稿は、古代国家の命運を決定づけた舞台としての四條畷神社を多角的にとらえた実証研究の報告である。

写真 1-6.神社の測量と調査班

既存の神社鳥居の関連資料情報を収集して、調査との規模と形態等についての概要を把握し、構成要素の現象を示す事実を明らかにしたい。国内において、神社鳥居の関連資料に関する報告は少ない。住民発達史や環境変遷史との関わりで、神社がどのような位置づけや問題点を有しているかという検討が重要である。

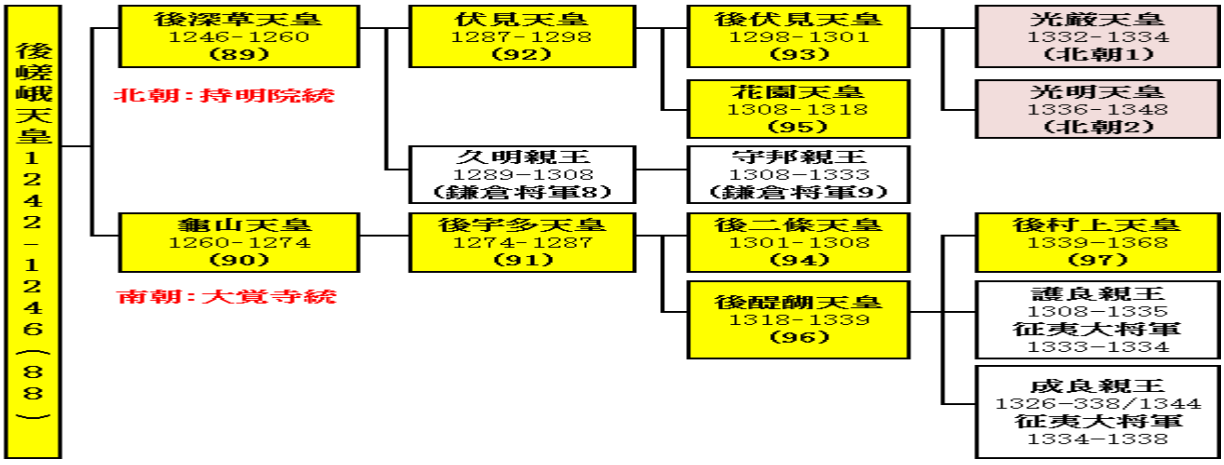
筆者は、鳥居の笠木(上端と下段)と貫(上端と下段)について回帰方程式によって勾配と決定係数を解明した。今後の研究課題として、神社の保全と環境問題などについて所見を整理したい。さらに、短時間の調査であったため未解明の事項が少なくない。今後も調査を継続する予定であるが、とりあえずこれまでの成果の所見を整理した。国際化時代に相応すべく、神社の由来については多国語(日本語・英語・韓国語)の翻訳を添付した。最後に、神社の年表と内容を纏めることができた。

2. 四條畷神社の資料

2-1.南北朝時代の後醍醐天皇と楠木正成

①後醍醐天皇は、http://ja.wikipedia.org/によると鎌倉時代後期から南北朝時代初期の第96代**後醍醐**天皇(1318-1339)年までである。歴史的事実としては在位途中に二度の廃位と譲位を経ている。鎌倉幕府を倒して建武新政を実施したものの、間もなく足利尊氏の離反に遭ったために大和吉野へ入り、南朝政権(吉野朝廷)を樹立した。大覚寺統・91代後宇多天皇(1274-1287)の第二皇子として正応元年(1288)年に誕生した。**後醍醐天皇の即位:**第91代後宇多天皇(1274-1287)の遺言状に基づき、はじめから後醍醐天皇は兄・第 94 代後二条天皇(1301-1308)の遺児である皇太子・邦良親王が成人して皇位につくまでの中継ぎとして位置づけられた。このため、後醍醐天皇が自己の子孫に皇位を継がせることは否定された。後醍醐天皇は不満を募らせた。元亨元(1321)年、後宇多天皇は院政を停止して、後醍醐天皇の親政が開始される。**表 2-1** は、第88代後嵯峨天皇(1242-1246年)から96代後醍醐天皇・97 代後村上天皇に至る系図である。北朝の持明院統の第 92 代伏見天皇(1287-1298)と南朝の大覚寺統の激しい戦いが展開された。

表 2-1. 第 96 代後醍醐天皇の系図



②後醍醐天皇の倒幕:正中元(1324)年、96 代後醍醐天皇(1318-1339)の鎌倉幕府打倒計画が発覚して、六波羅探題が天皇側近日野資朝らを処分する**正中の変**が起こる。大覚寺統に仕える貴族たちはもともと邦良親王

を支持する者が大多数であり、持明院統や幕府も基本的に彼らを支持したため、後醍醐天皇は次第に窮地に陥ってゆくのである。南北朝時代の乱とは、元弘の乱-中先代の乱-箱根竹ノ下-多々良浜-湊川-金ヶ崎-青野原-石津-藤島-四條畷-打出浜-薩埵峠-筑後川である。

③赤坂城の戦い(北朝軍の勝利)において、決戦時期は元弘元(1331)年9-10月、決戦場所は河内国赤坂城である。南朝と北朝はそれぞれ南朝(大覚寺統)と北朝(持明院統)である。指揮官は護良親王・楠木正成(**1294？-1336**)と北条貞直の対立である。交戦戦力は後醍醐天皇勢力対鎌倉幕府である。戦力は南朝軍戦力500名対北朝軍約20-30万名である。損害は南朝軍では赤坂城陥落、護良親王・楠木正成逃亡、北朝軍では死傷者:約1,000以上である**(表 2-2)。**元弘元(1331)年、再度の倒幕計画が側近吉田定房の密告により発覚し身辺に危険が迫ったため急遽京都脱出を決断、三種の神器を持って挙兵した。はじめ比叡山に拠ろうとして失敗し、笠置山(現京都府相楽郡笠置町内)に籠城するが、圧倒的な兵力を擁した幕府軍の前に落城して捕らえられる。これを**元弘の乱(元弘の変)と呼ぶ。**

④元弘の乱は、1331-1333 年に起きた、後醍醐天皇を中心とした勢力による鎌倉幕府討幕運動である。鎌倉幕府が滅亡に至るまでの一連の戦乱である。元弘の変(ｹﾞﾝｺｳﾉﾍﾝ)とも呼ぶ。笠置山・赤坂城の戦い、千早城の戦い、六波羅攻略、鎌倉攻略、九州である。

表 2-2.赤坂城の戦いと元弘の乱(元弘の変)

	赤坂城の戦い(**北朝軍の勝利**)		元弘の乱(**南朝軍**の勝利)	
決戦時期	元弘元(1331)年9-10月		元弘元-3/正慶2(1331 - 1333)年	
決戦場所	河内国赤坂城		六波羅、鎌倉他	
南朝と北朝	南朝(大覚寺統)	**北朝(持明院統)**	**南朝(大覚寺統)**	北朝(持明院統)
指揮者(官)	護良親王・**楠木正成**	北条貞直	足利高氏・新田義貞・**楠木正成**	北条高時/北条仲時
交戦戦力	後醍醐天皇勢力	鎌倉幕府	後醍醐天皇勢力	鎌倉幕府
戦　力	500	約20-30万	不明	不明
損　害	赤坂城陥落、護良親王・**楠木正成逃亡**	死傷者:約1,000以上	後醍醐天皇勢力の勝利	鎌倉幕府の滅亡
H　P	http://ja.wikipedia.org/wiki/赤坂城の戦い		http://ja.wikipedia.org/wiki/元弘の乱	

元弘の乱について、決戦時期は元弘元年(1331)～元弘 3 年(1333 年。決戦場所は六波羅と鎌倉他である。指揮者(官)は北条高時・北条仲時対足利高氏・新田義貞・楠木正成である。交戦戦力は鎌倉幕府と後醍醐天皇勢力である。損害では後醍醐天皇勢力の勝利で、鎌倉幕府の滅亡である。損害は南朝軍では後醍醐天皇勢力の勝利で、北朝軍では鎌倉幕府の滅亡である(**表 2-2**)。

⑤後醍醐天皇の流罪と復帰:幕府は後醍醐天皇が京都から逃亡するとただちに廃位し、光厳天皇(北朝 1)を即位させた。捕虜となった後醍醐は、承久の乱の先例に従って謀反人とされ、翌元弘2・正慶元(1332)年には隠岐島に流された。この時期、後醍醐天皇の皇子**護良親王**や河内の**楠木正成**、播磨の赤松則村(円心)ら反幕勢力(悪党)が各地で活動していた。このような情勢の中、後醍醐は元弘3・正慶 2(1333)年、名和長年ら名和一族を頼って隠岐島から脱出し、伯耆船上山(現・鳥取県東伯郡琴浦町内)で挙兵する。これを追討するため幕府から派遣された足利高氏(尊氏)が後醍醐方に味方して六波羅探題を攻略した。その直後に東国で挙兵した新田義貞は鎌倉を陥落させて北条氏を滅亡させる。

⑥千早城の戦い(南朝軍の勝利)において、決戦時期は元弘3・正慶2(1333)年2月、決戦場所は千早城である。指揮者(官)は楠木正成・楠木正季・平野将監対名越宗教・安東円光・阿蘇治時・長崎高貞・大仏家時・工藤高景の交戦である。戦力は楠木正成対鎌倉幕府である。戦力は100人(南朝軍)対100万人(北朝軍)である。損害は楠木正成軍の勝利である(**表 2-3**)。

表 2-3.千早城の戦いと中先代の乱

	千早城の戦い(**南朝軍**の勝利)		中先代の乱(**南朝軍**の勝利)	
決戦時期	元弘3・正慶2(1333)年2月		建武2(1335)年7月	
決戦場所	千早城		関東周辺 (武蔵国、下野国、駿河国、遠江国、相模国)	
南朝と北朝	**南朝(大覚寺統)**	北朝(持明院統)	**南朝(大覚寺統)**	北朝(持明院統)
指揮者(官)	**楠木正成・楠木正季**・平野将監	名越宗教・安東円光・阿蘇治時・長崎高貞・大仏家時・工藤高景	足利尊氏	北条時行
交戦戦力	**楠木正成**	鎌倉幕府	建武新政軍	旧鎌倉幕府軍
戦　力	100人	100万人	不明	不明
損　害	**楠木正成軍の勝利**	鎌倉幕府軍	建武新政軍の勝利	旧鎌倉幕府軍の鎌倉退
H　P	http://ja.wikipedia.org/wiki/千早城の戦い		http://ja.wikipedia.org/wiki/四條畷の戦い	

⑦**中先代**の乱(南朝軍の勝利)において、決戦時期は建武2(1335)年7月である。決戦場所は関東周辺(武蔵国、下野国、駿河国、遠江国、相模国)である。指揮官は足利尊氏対北条時行である。交戦戦力は建武新政軍対旧鎌倉幕府軍である。損害は建武新政軍の勝利で、旧鎌倉幕府軍の撤退である(**表 2-3**)。

⑧**後醍醐天皇の建武の新政**:帰京した後醍醐天皇は、自らの退位と光厳天皇の即位及び在位を否定し、光厳朝で行われた人事を全て無効にするとともに幕府・摂関を廃していわゆる**建武の新政**を開始する。また、持明院統のみならず大覚寺統の嫡流である邦良親王の遺児たちをも皇位継承から外し、本来傍流であったはずの自分の皇子恒良親王を皇太子に立て、父の遺言を反故にして自らの子孫により皇統を独占する意思を明確にした。

⑨**後醍醐天皇と足利尊氏の離反(延元の乱)**:建武2(1335)年、**中先代の乱**の鎮圧のため勅許を得ないまま東国に出向いた足利尊氏が、乱の鎮圧に付き従った将士に鎌倉で独自に恩賞を与えるなど新政から離反する。京都で**楠木正成**や北畠顕家らと連絡して足利軍を破る。尊氏は九州へ落ち延びるが、翌年に九州で態勢を立て直し、光厳天皇の院宣を得たのちに再び京都へ迫る。**楠木正成**は後醍醐天皇に尊氏との和睦を進言するが後醍醐天皇はこれを退け、義貞と正成に尊氏追討を命じる。しかし、新田・楠木軍は**湊川の戦い**で敗北し、正成は討死し義貞は都へ逃れる。

表 2-4 は、南北朝時代(96代から102代、北朝初代～6代)において、南朝(大覚寺統)の 96 代後醍醐天皇と北朝(持明院統)の関係を表示した。1331年、赤坂城の戦、鎌倉幕府軍対楠木正成が逃亡された。それによって、北朝 1 光厳天皇は南北朝天皇に成っている。1332 年、正成逃亡翌年は、北朝の政権であった。1333年、元弘の乱と千早城の戦い、**楠木正成**と鎌倉幕府軍の対立である。その結果、楠木正成が南朝勝利し、鎌倉幕府を滅亡させた。

表 2-4.南北朝時代(96代から102代、北朝初代～6代)

和　歴	西暦	南朝(大覚寺統)	北朝(持明院統)	内　　容
元応元	1319	96代後醍醐天皇	96代後醍醐天皇	
元応02	1320	96代後醍醐天皇	96代後醍醐天皇	治部大輔辞任
元徳02	1330	96代後醍醐天皇	96代後醍醐天皇	嫡子義詮誕生
元弘元	1331	96代後醍醐天皇	96代後醍醐天皇	赤坂城の戦、鎌倉幕府軍対**正成が逃亡**
正慶元	1332	北朝1 光厳天皇	北朝1 光厳天皇	**正成逃亡翌年、北朝の政権。**
正慶02	1333	96代後醍醐天皇	96代後醍醐天皇	元弘の乱と千早城の戦い。**楠木正成**対鎌倉幕府軍。正成の南朝勝利、鎌倉幕府滅亡。
建武2	1335	96代後醍醐天皇	96代後醍醐天皇	中先代の乱。南朝勝利
延元元	1336	96代後醍醐天皇	北朝2 光明天皇	湊川の戦いで北朝勝利、楠木正成死亡
暦応3	1340	97代後村上天皇	北朝2 光明天皇	兵庫の福海寺(福海興国禅寺)建立
正平03	1348	97代後村上天皇	北朝2 光明天皇	四條畷の戦い北朝勝利、楠木正行死亡
正平05	1350	97代後村上天皇	北朝3 崇光天皇	観応の擾乱。征夷大将軍解任

1335 年、中先代の乱で、南朝が勝利した。1336 年、湊川の戦いで北朝勝利、楠木正成死亡した。1348年、四條畷の戦い北朝勝利、楠木正行死亡した。

⑩南北朝時代の戦い:足利軍が入京すると後醍醐天皇は比叡山に逃れて抵抗するが、足利方の和睦の要請に応じて三種の神器を足利方へ渡し、尊氏は**光厳上皇(北朝 1)**の院政のもとで持明院統から光明天皇**(北朝 2)**を新天皇に擁立し、建武式目を制定して幕府を開設する(**太平記**、後醍醐天皇は比叡山から下山するに際し、先手を打って恒良親王(96 代天皇の子)に譲位)。廃帝後醍醐は幽閉されていた花山院を脱出し、尊氏に渡した神器は贋物であるとして、吉野(現・奈良県吉野郡吉野町)に自ら主宰する朝廷を開き、京都朝廷(北朝)と吉野朝廷(南朝)が並立する**南北朝時代**が始まる。後醍醐天皇は、尊良親王(96 代天皇の子)や恒良親王らを新田義貞に奉じさせて北陸へ向かわせ、懐良親王を征西将軍に任じて九州へ、宗良親王を東国へ、義良親王を奥州へと、各地に自分の皇子を送って北朝方に対抗させようとした。しかし、劣勢を覆すことができないまま病に倒れ、延元 4 年・ 暦応 2(1339)年、奥州に至らず、吉野へ戻っていた義良親王(後村上天皇)に譲位し、翌日、吉野金輪王寺で朝敵討滅・京都奪回を遺言して崩御した。享年 52(満 50 歳)。

⑪湊川の戦い(北朝軍の勝利)について、九州から東上して来た足利尊氏・足利直義兄弟らの軍と、これを迎え撃った後醍醐天皇方の新田義貞・楠木正成の軍との間で行われた合戦である。決戦時期は建武 3(1336)年 5 月 25 日。決戦場所は摂津国湊川(現・兵庫県神戸市中央区・兵庫区)である。南朝と北朝の対戦について、南朝(大覚寺統)対北朝(持明院統)である。指揮官について、南朝指導者(指揮官)は、新田義貞・脇屋義助・大館氏明・額戸為綱・楠木正成・菊池武吉である。北朝指導者(指揮官)は、陸軍(足利直義、高師泰、斯波高経、少弐頼尚、赤松則村)、海軍(足利尊氏、細川定禅、高師直)である。交戦戦力は新田・楠木軍対足利軍である。戦力は対南朝軍の2万5千人対北朝軍の約5万人である。損害は新田軍:不明、楠木軍:壊滅である**(表 2-5)**。

表 2-5.湊川の戦いと四條畷の戦い

	湊川の戦い(**北朝軍**の勝利)		四條畷の戦い(**北朝軍**の勝利)	
決戦時期	建武3(1336)年5月25日		正平3 (1348)年正月5日	
決戦場所	摂津国湊川(兵庫県神戸市中央区・兵庫区)		河内国の北條(大阪府四條畷市・大東市)	
南朝と北朝	南朝(大覚寺統)	**北朝(持明院統)**	南朝(大覚寺統)	**北朝(持明院統)**
指揮者(官)	新田義貞/脇屋義助/大館氏明/額戸為綱/**楠木正成**/菊池武吉	陸軍:利直義/高師泰/斯波高経/少弐頼尚/赤松則村。海軍:足利尊氏/細川定禅/高師直	**楠木正行**	高師直(もろなお)
交戦戦力	新田・**楠木軍**	足利軍	**楠木軍**	足利軍
戦力	対2万5千人	高師直(約5万人)	3千人	6－8万人
損 害	新田軍:不明、**楠木軍:壊滅**	不明	不明	不明
H P	http://ja.wikipedia.org/wiki/湊川の戦い		http://ja.wikipedia.org/wiki/四條畷の戦い	

⑫四條畷の戦い(北朝軍の勝利)について、決戦時期は正平 3 (1348)年正月 5 日である。決戦場所は河内国の北條(大阪府四條畷市・大東市)である。南朝と北朝の対戦は南朝(大覚寺統)対北朝(持明院統)である。指揮官は楠木正行対高師直(コウ-ノ-モロナオ)である。

交戦戦力は南朝の楠木正行と北朝の足利尊氏(家臣高師直)との間の戦いである。戦力は南朝の 3 千人対南朝の高師直(約 6-8 万人)である。3千人の兵を率い枚岡の**往生院**(オウジョウイン・**写真 2-1**)に本陣を置いた正行公は、一挙北進し、**深野池**(フコノイケ)の東、野崎に構える高師直の先陣を撃ち破り、師直に迫つたが替玉に欺(アザム)かれて取り逃がし、遂に多勢に無勢、後方との連絡も絶たれ、あわれ 23 才を一期として深野地の東北、葦(あし)の繁れ

写真 2-1.近鉄瓢箪山駅のホームに往生院である

る所にて弟正時公と刺し違え殉節された。他の者達も腹かき切つて息絶えた。また、古戦田なる地名も三ケ所あつた。損害は楠木軍の壊滅である(**表 2-5**)。

後村上天皇の御言葉として、度々の敗戦に驚いた足利尊氏(ｱｼｶｶﾞｰﾀｶｳｼﾞ)は、腹心の高師直・師泰(ﾓﾛﾔｽ)に八万の大兵を授けて向かわせた。楠木正行公も死を覚悟して吉野の行宮(ｱﾝｸﾞｳ)に参代(ｻﾝﾀﾞｲ)し、後村上天皇に「この度は敵も精兵を集めて攻めて来ましたので、私も生きるか死ぬかの大決戦を致します。最後の思い出に陛下(へいか」のお顔を拝してから参りとうございます」と申し上げた。天皇も「私はお前を自分の手足の如く思い頼つているのだから決して無理なおお事はしないように」と仰せられた。

2-2.南北朝時代の楠木正成と楠木正行

楠木氏は、河内国の豪族で、南北朝時代に活躍した南朝方の武家。「楠氏」と表記される事もある。本姓は橘氏。一般に伊予橘氏(越智氏の分家)の橘遠保の末裔という。諸家には、同じく橘姓の熊野国造和田氏の出身で、正成の一族以外の子孫が多く和田氏を称しているのは、和田氏に復したものと考えられる。

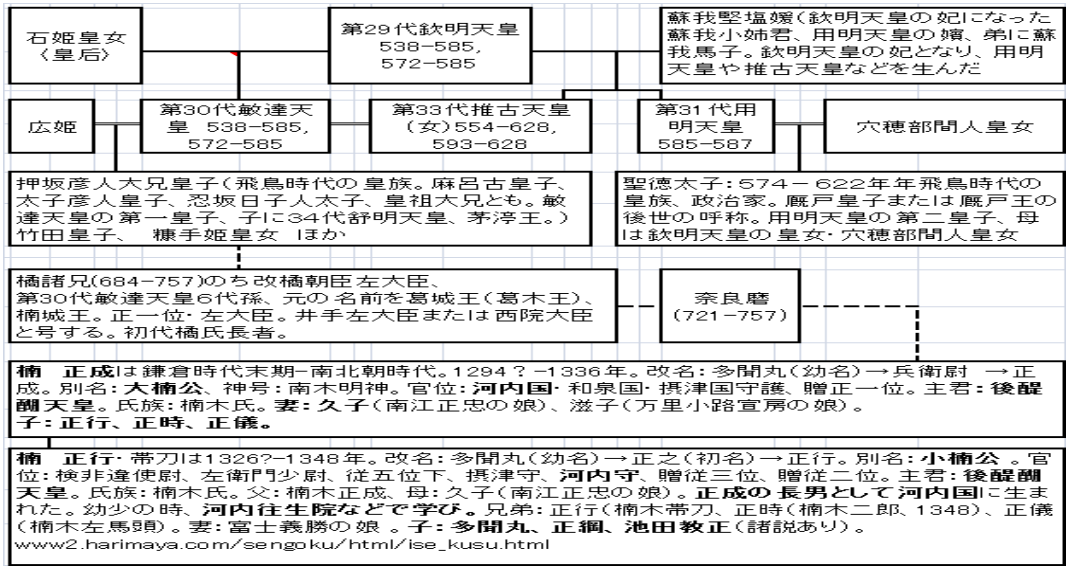
東国武家集団が北条得宗家の被官として、赤松氏と共に播磨や摂津・南河内・和泉など北条氏の守護国などの得宗領に移住し、そのまま土着したとする説もある。楠木氏は、元来関東にいた御家人で、利根川流域ある東国武士の有力集団の一派。また、駿河国入江荘楠木村(現静岡市清水区)を出自とする武士とも言う。鎌倉幕府が 1293 年に楠木村を鶴岡八幡宮に寄進したという記録、幕府の有力御家人だった長崎氏の出自は楠木村の隣の長崎郷で河内に領地を保有していた。その関係で楠木氏が河内に移ったと言う。

鎌倉時代後期に楠木正成は後醍醐天皇が鎌倉幕府に対して挙兵した元弘の乱において宮方に従い、幕府滅亡後に成立した建武政権に加わり、南北朝時代に南朝(吉野朝廷)方として活躍した以降である。その後正成の子の正行、正時や、正成の弟の正季などは北朝の足利尊氏との戦いで戦死し、生き残った正成の子の正儀は南朝零落後にも有力武将として活躍し、北朝との和睦を仲介する。その後、正儀の子孫は播磨国で平木氏を名乗ったとも言われている。

南北朝合一以降、楠木氏の一族は殆どが南朝方についた。そのため、南朝の凋落と共に一族も没落した。南北朝合一後に後南朝の武将としても楠木正秀や楠木光正ら楠木氏一族が確認できる。北朝を擁立した足利幕府の時代に朝廷(北朝)に仇をなしたとして逆賊として扱われていた。寛正元年(1460)年に楠木氏の一族が処刑された際に東福寺の大極正易はその日記(『碧山日録』)に楠木氏は無辜の民を戮殺した積悪の報によって滅びたと記している。

南朝が正統な朝廷とする史観が定着するや、楠木正成や楠木氏は忠臣の代表として賞賛され、顕彰されるようになる。しかし、明治政府の国家権力を以てしても、楠木氏末裔を称する氏族は数多いものの、楠木氏の直系の子孫を確認する事はできなかった。そのため、同じ南朝の忠臣でも、菊池氏や名和氏などは子孫が華族に列したが、楠木氏からは華族は生まれていない(**表 2-6**)。

表 2-6.楠木正成と楠木正行の系図



楠木正行の系図について考察すれば、第29代欽明天皇(539-571)の子孫である。欽明天皇の子には30代敏達天皇(572-585)と第31代用明天皇(585-587)である。第30代敏達天皇と広姫間に生まれた押坂彦人大兄皇子(飛鳥時代の皇族。麻呂古皇子、太子彦人皇子、忍坂日子人太子、皇祖大兄とも。敏達天皇の第一皇子、子に34代舒明天皇、茅渟王。と竹田皇子が生まれた。一方、第31代用明天皇(585-587)と穴穂部間人皇女の間に聖徳太子:574－622年年飛鳥時代の皇族、政治家で、厩戸皇子または厩戸王の後世の呼称。用明天皇の第二皇子生まれた。

橘諸兄(684-757)のち改橘朝臣左大臣は、第30代敏達天皇6代孫、元の名前を葛城王(葛木王)、楠城王。正一位・左大臣。井手左大臣または西院大臣と号する初代橘氏長者である。**楠木正成**は鎌倉時代末期-南北朝時代。1294？-1336 年。改名:多聞丸(幼名)→兵衛尉→正成。別名:大楠公、神号:南木明神。官位:河内国・和泉国・摂津国守護、贈正一位。主君:後醍醐天皇。氏族:楠木氏。妻:久子(南江正忠の娘)、滋子(万里小路宣房の娘)。子は正行、正時、正儀である。**楠木正行**・帯刀は 1326?-1348 年。改名:多聞丸(幼名)→正之(初名)→正行。別名:小楠公。官位:検非違使尉、左衛門少尉、従五位下、摂津守、河内守、贈従三位、贈従二位。主君:後醍醐天皇。氏族:楠木氏。父:楠木正成、母:久子(南江正忠の娘)。正成の長男として河内国に生まれた。幼少の時、河内往生院などで学び。兄弟:正行(楠木帯刀、正時(楠木二郎、1348)、正儀(楠木左馬頭)。妻:富士義勝の娘。子:多聞丸、正綱、池田教正(諸説あり)(**図 2-7**)。www2.harimaya.com/sengoku/html/ise_kusu.html

表 2-7.楠木正行像

時代:南北朝時代	氏族:楠木氏	石像:大阪府大東市飯盛	死没:1348 年 2 月 4 日
別名:小楠公	妻　:富士義勝の娘	改名:多聞丸(幼名)→正之(初名)→正行	
墓所:宝筐院、他	兄弟:正行、正時、正儀	父母:父:楠木正成、母:久子(南江正忠の娘)	
主君:後醍醐天皇	生誕:嘉暦元年(1326 年)?	子　:多聞丸、正綱、池田教正(諸説あり)	
官位:検非違使尉、左衛門少尉、従五位下、摂津守、河内守、贈従三位、贈従二位			

河内国讃良郡南野村字雁屋に「楠塚」と呼ばれる楠木正行の墓があった。明治期になると明治政府によって南朝が正統とされ、正行の父である楠木正成が**大楠公**(ナンコウ)として神格化されると、その父の遺志を継いで南朝のために戦い命を落とした嫡男の正行も**小楠公**と呼ばれ崇められるようになった。それに伴い、明治11(1878)年に楠塚は「小楠公御墓所」と改められ、規模も拡大した。同じ頃、南野村飯盛山の山麓にある住吉平田神社の神職らが中心となり、楠木氏らを祀る神社の創建を願い出た結果、明治 22(1889)年に神社創立と別格官幣社四條畷神社の社号の宣下が勅許され、翌明治 23(1890)年に住吉平田神社の南隣の地に創建した。

当社創建以降、明治 28(1895)年に浪速鉄道が大阪市中心部から当社近くの四條畷駅まで開業するなどして四條畷神社周辺は大いに栄える事となり、所在地の讃良郡甲可村(南野村ほか 6 ヶ村合併による)には「四條畷」と付く施設が次第に増え、「四條畷」は甲可村の別称のようになって行った。昭和 7(1932)に甲可村はついに四條畷村に改称するに至り、これが現市名にまで継承されている。同年には浪速鉄道から転じて国鉄路線となっていた片町線の四条畷駅以西において関西国鉄初の電車運転が開始されるなどして、四條畷神社創建をきっかけに周辺一帯は北河内地方随一の大市街地に発展してその賑わいは現在も続いている。

2-3.桜井の別れ

楠木正成は死を覚悟の兵庫出陣に当たり、摂津国島上郡桜井村の桜井駅(三鳥都鳥本町桜井)において、父楠木正成と子楠木正行(11 歳)が訣別する逸話、「父の死後は足利氏の天下になるだろうが、どこまでも正統の天皇をお守りせよ。それが父への孝行になるのだ」とさとして、身も心も我が子に伝へて出陣された。(*桜井駅にある子別れの碑は、この話に感激した英国公使パークスが最初に建てた。*)

『太平記』によると、「桜井の別れ」を要約すれば、建武三(1336)年、九州で劣勢を挽回して山陽道を怒濤の如く東上してきた足利尊氏の数十万の軍勢に対し、その 20 分の 1 ほどの軍勢しか持たない朝廷方は上を下への大騒ぎとなった。新田義貞を総大将とする朝廷方は兵庫に陣を敷いていたが、正成は義貞の器量を疑い、今の状況で尊氏方の軍勢を迎撃することは困難なので、尊氏と和睦するか、またはいったん都を捨てて比叡山に上り、空になった都に足利軍を誘い込んだ後、これを兵糧攻めにするべきだと後醍醐帝に進言したが、いずれも聞き入れられなかった。そこで正成は死を覚悟し、湊川の戦場に赴くことになった。

その途中、桜井の駅にさしかかった頃、正成は数え 11 歳の嫡子・正行を呼び寄せて「お前を故郷の河内へ帰す」と告げた。「最期まで父上と共に」と懇願する正行に対し、正成は「お前を帰すのは、自分が討死にしたあとのことを考えてのことだ。帝のために、お前は身命を惜しみ、忠義の心を失わず、一族朗党一人でも生き残るようにして、いつの日か必ず朝敵を滅せ」と諭し、形見にかつて帝より下賜された菊水の紋が入った短刀を授け、今生の別れを告げた。なお、訣別に際して桜井村の坂口八幡宮に菊水の旗と上差しの矢一交が納められ、矢納神社の通称で呼ばれた。

写真 2-2.貞人両全

写真 2-3.忠孝両全

写真 2-4.桜井の別れ文

写真 2-2 は貞人両全である。ここで、貞とは、ただしい、節操が堅く正しい。「貞潔・貞淑・貞女・貞節・貞操／孝貞・忠貞・童貞・不貞」の神意である。両全とは、両方とも完全であること、二つとも完全にすることの意味である。**写真 2-3** は忠孝両全である。忠孝とは君主に対する忠義と親に対する孝行を結合して説かれた道徳思想で、中国の儒教思想に源流をもつ。日本では古くから人倫道徳の大本として重んじられた意味である。**写真 2-4** は、桜井の別れ文である。

写真 2-5.父子訣別の碑文

写真 2-6.明治天皇御製碑文

写真 2-7.英国公使記念

写真 2-8.調査団と家族

写真 2-9.父子別れ石像

写真 2-10. 調査団員

写真 2-11.国指定桜井駅

写真 2-12.JR 島本(旧桜井)駅

2-4.賢母の教え

足和尊氏（アシカガータカウジ）より送られてきた父の首を前に、悲しみの余り後を追って自害しようとした正行公を、「父上の遺訓を忘れたか」と懇々とさとして奮起させ、国家の忠臣として育てあげたのが母である。

2-5.赤十字精神

成人して検非違使(ケビイシ)、河内守を兼ねた小楠公は積極的な戦法で、しばしば賊を破る。**正平 2(1346)年** 11 月には瓜生野(ウリノ)（現在の平野区瓜破(ウリワリ)西付近)の戦で、敗走する多数の敵兵が渡辺橋（現在の中央区天満橋付近)から落ちておぼれるのを救い上げ、折からの寒気に凍える者に衣薬を与え、傷の手当をして京都へ送り返してやった。(*今より約 150 年前、赤十字で有名なナノチンゲールが、敵、味方の区別なく傷ついた兵士を看護した話に先立つ事 500 年前の事である。*)

2-6.小楠公御墓所(大阪府天然記念物指定)

(1348)年、正行卿が、大東市字ハラキリにて、御弟正時卿をはじめ宗族将士と共に殉節された。御遺体は直ちに現在地に移された。小楠公御墓所は、四條畷神社表参道を下り西へ約 1 ㎞、突き当たりにあり、当時のここは深野池の堤防である(**表 2-4と5**)。村人は、卿にお慕いし密かに御骸を葬り奉り、足利氏を憚(遠慮)り**南無権現**と書いた小碑を建て 2 本の両脇に植えて墓とした。権現とは日本における神仏の称号の一つ。南無は帰依する意味である。

写真 2-13.四條畷神社表参道

写真 2-14.別格官幣四條畷神社

表 2-8.小楠公(楠木正行)墓所

碑の建立:**(後)天正 12(1584)**年	墓地:**正平 3(1348)**年、四條畷の戦いで戦死した地。
現在地:大阪府四條畷市雁屋南町 27 番 5 号。	位置:北緯 34 度 43 分 57 秒，東経 135 度 38 分 12 秒。
府文化財:クスノキの巨木(樹齢 600 年)・大阪府指定の天然記念物	小楠公墓所:大阪府四條畷市にある南北朝時代の南朝の将、楠木正行の墓(**写真 2-6**)。
形状:供養塚。被葬者:楠木正行。	築造年代:15 世紀前半。規模:小碑と楠の木 2 本。
墓:幹の廻り 12m以上、後 60m 四方に拡張整備	石碑:大久保利通公筆の高さ**約 7.5m** 大碑石も建立
墓入口:右手に「忠」、左手に「孝」を刻んだ石柱がある。	墓石「贈従三位楠正行朝臣之墓」と「**楠公父子訣別之所**」と刻んだ(**写真 2-7**)。

写真 2-15.楠木正行(小楠公)墓地

写真 2-16.楠木正行(小楠公)贈従三位

写真 2-17.楠の木は府指定史跡

写真 2-18.小楠公偲ぶ会の記念版

①楠木のこもれ日あびる小楠公

樹齢 587 年、巨龍昇天のうねりに似た神木、幹の廻り 12m以上、石碑の高さ約 7.5m 大碑石も建立、明治 11 年 1 月 5 日に建碑式を挙行、楠の木は、府指定天然記念物の墓地は府指定史跡である(**写真 2-8**)。**写真 2-9** は小楠公偲ぶ会の記念版である。

②小楠公墓地 （飯盛山の麓）

この墓地は、南北朝忠臣楠正成の長子正行公が足利尊氏の部(武)将高師直の大軍と戦い、戦死し葬られた所である。正平３(1348)年１月、今から**633 年前**で、その後ここに小さな石碑が建てられていた。その後、100 年余りして何人かが碑の近くに二本の楠を植えたが、これがその二本合し、石碑をはさみこみ、このような大木(樹齢約 550 年)となった(**写真 2-20 と 21**)。今も正行たちの忠誠を永遠に称えている。我が会は この意義ある楠を保存する。**写真** 2-20 は正行が最初の拡大墓地であり、楠木の下にある小さい石が墓所であった。墓所は**天正 12(1584)**年に移された。**写真** 2-21 は正行墓の全景である。

写真 2-19.最初の墓地

写真 2-20.正行墓の全景

③御祭神殉節所

所在地:大阪府北河内郡四條畷村大字南野刈屋。.飯盛山の麓。境 内:1054 坪。**正平 3(1348)**年、南朝、誠忠純孝正義のため殉節御昇神あらせる土地の人「南無権現」と刻み、小さき自然石の碑を建て、若き樟の樹を其両側に植えて以て公の御遺徳を追慕景仰したりしが、二本の楠樹は年経て合して一株となり、小碑は其の中に包まれて地中に埋れ。御祭神と共に殉節せられたる宗族部将 24 将士の氏名を刻みたる四條畷表忠碑は、元老院議官税所篤。

3.四條畷神社の由来と現在

3-1.四條畷神社の和文由来と現在

①祭神:当社の主祭神である楠木正行(1326？-1348)公は、楠木正成(1294？-1336)公の御嫡男で、検非違使、左衛門尉となり、河内守(官位)をも兼ねられた。楠木正行は父の死後、南朝の将として活躍した。その後、**正平 3 年(1348)**この地で足利軍と激戦し戦死した。四條畷の地は御宗族将士と共に誠忠、純孝、正義のために殉節あらされたる由縁の地である。**明治 30(1897)**年、明治天皇は父の正成公に劣らぬ所の忠節を嘉せられた。御祭神の正行公には従二位が、追贈せられた。

②戦いで敗北:延元元(1336)年 5 月 25 日、父の正成公は、湊川の戦で自刃された。出陣に当り、11 歳の子である正行公と桜井駅(現・三島郡島本町)で別れを伝えて出陣された。遺訓は、「父の死後は足利義昭(幕府第 15 代将軍)の天下になるだろうが、どこまでも正統の天皇をお守りせよ、それが父への孝行である」である。(桜井駅にある子別れの碑は、この話に感激した英国公使パークスが最初に建てた)。

桜井の駅の別れにおいて諭された父の遺訓を固く守った小楠公は、南朝方の中心となって、幼い後村上天皇を守護され正義の為に戦われた。足利高氏より送られてきた父である正成公の首を見た時、悲しみ余り後を追って自害しようとした。が、遺訓を母に懇々と諭され奮起し、正統の天皇を守り、朝敵征伐(朝廷に敵対する勢力)を宿願とされた。積極的な戦法でしばしば敵を破った。**正平 2(1347)**年、瓜生野(現・平野区瓜破西)の戦いでは、数倍の敵を打撃した。3000 人の兵を率いて高師直(ｺｳﾉﾓﾛﾅｵ)・師泰(ﾓﾛﾔｽ)率いる8万の大軍と四条畷で戦い、激戦の末、敗北した。そのために弟・正時と正行は差し違えた自害・討死(23 才)された。

③博愛精神:正平 3(1348)年、3000 の兵を率い枚岡の往生院に本陣を置いた正行公は、一挙北進し、深野池の東野崎に構える高師直の先陣を撃ち破、四條畷に進出した。正行軍は、全軍一丸となって突き進み、その奮闘に敵勢はたじろぎ、一度は、師直の本営に迫り師直を討ち果たしたかと思ったが、上山某なる替玉であった。敗走する多数の敵兵が、渡辺橋(現・中央区天満橋)から落ちて溺れるのを見た正行公は救いあげ、寒気に凍える者に衣薬を与え、傷の手当をして京都へ送り返された。(**ナイチンゲール**が、敵や味方の区別なく、傷ついた兵士を看護した約 500 年も前の話である)。明治になって西洋の**赤十字精神**が日本に入ってきた「博愛精神」が、日本人に受け入れられる礎ともなった。

④大阪府の天然記念物:足利高氏は、度々の敗戦に驚き、腹心の高師直と師泰を総大将に八万の大軍を向かわせた。正行公は、この戦いに死を覚悟し、吉野の行宮に参内し、97代後村上天皇(1339-1368)に、「此度は、敵も大軍を集めて攻めて参ります。最後の思い出に天皇のお顔を拝してから参りとうございます」と申し上げた。天

皇は、「私はお前を自分の手足のごとく思い頼っている。決して無理なことはしないように」と仰せられ、天皇のお言葉に感泣して、先帝96代後醍醐天皇(1318-1339)の御陵を拝し、次いで如意輪堂に行き一族143名の名を留め、辞世の歌を記して出陣された。小楠公の御墓所は、深野池の堤防であった所である。その楠は現在幹廻り10m以上の大木に成長し、大阪府の天然記念物に指定されている。

⑤伝承:**慶應4(1868)**年、河内國・現四條畷市の住吉平田神社神職らが正行をはじめ、和田賢秀ら四条畷の戦いで南朝に殉じた楠一族将兵の霊を祀る神社の創建を願い出た。**明治 9(1876)**年、殉節の地域は字刈屋にあり、従三位を追贈せられた。**明治10(1877)**年、彊域を擴めて一大石碑を建て、明治天皇大行幸にあたり、勅使を差遣さられて公の精忠を追感せられ、金幣を賜った。**明治22(1889)**年、大阪府知事より神社創立と四條畷神社を宣下され、別格官幣社に列格せられた。さらに、明治天皇より神社創立と『四條畷神社』の社号が下され、別格官幣社(国家の忠臣を祀る)に列格された。**明治23(1890)**年、御墓所の東、飯盛山麓に社地を定め、創建鎮座した。

⑥構造物:

明治23(1890)年、御鎮座された。**平成2(1990)**年、住吉平田神社の南隣の地に創建し、御鎮座百年奉祝大祭が斎行された。平成元(1989)年、本殿を始め拝殿等の修復、社務所の新築、境内地の諸施設の整備拡張をした。建築様式は流れ造りである。創建年代は明治23(1890)年である。拝殿の規模は、正面9.53m、側面5.89mと面積56.13m2である。摂社の御姚(みおや)神社は、流れ造り、大正13(1924)年の創建である。末社は、楠天神社と有源招魂社である。鳥居は、3つの鳥居である。石灯籠の高さは、最大5.98mで、数は8基である。

表3-1.大阪府四條畷市、四條畷神社の日文詳細資料

1	**主祭神**	楠木正行　(別称:小楠公)　juu2i　楠木正行-Lord
2	**神社創建**	明治23(1890)年
3	**祭　神**	配祀は楠木一族の将士24柱である。 ①楠木正時、②楠木正家、③楠木正家子息、④和田賢秀、⑤和田正朝等。
4	**社格等**	別格官幣社、別表神社
5	**例　祭**	月次祭:毎月1・15日、殉節祭:2月12日、春祭:4月5日、秋祭:10月5日
6	巡拝等	建武中興十五社の一社　なにわ七幸めぐり　神仏霊場61番
7	**宮　司**	宮司は大阪府神社庁長であり寺井種伯(タネノリ)兼務、権禰宜は南井広也である。
8	**鎮座地**	575－0021大阪府四條畷市南野二丁目18番1号
9	**交通手段**	JR片町線「四条畷」駅より徒歩約16分
10	**位　置**	北緯34度43分56.7秒　東経135度38分57秒。
11	**標　高**	61m
12	**電話・FAX**	TEL072－876－0044　and　FAX　072－879－2888
13	**本　殿**	本殿の規模は、正面4.21m、側面6.47mと面積27.24m^{2}である。 建築様式:流れ造り。創建年代:明治23(1890)年。
14	**拝　殿**	拝殿の規模は、正面9.53m、側面5.89mと面積56.13m^{2}である。 建築様式:流れ造り。創建年代:大正13(1924)年。
15	**境内末社**	摂社、御姚(みおや)神社の規模は、正面2.54m・側面3.51m・面積8.92平方m^{2}で、建築様式:流れ造り。創建年代:大正13(1924)年である。末社:楠天神社の規模は、正面1.78m・側面1.93m・面積3.44平方mである。 末社:有源招魂社の規模は、正面2.96m・側面2.66m・面積7.87平方mである。
16	**鳥　居**	一の鳥居(平成2(1990)年、貫上3.91m、笠木上4.77m、神明系で反り増しはない。 二の鳥居(昭和12(1937)年、貫上4.73m、笠木上5.86m、反り増し6.06m。 三の鳥居(明治25(1892)年、貫上5.18m、笠木上6.51m、反り増し6.71m。
17	**灯　籠**	石灯籠の高さは、最大5.98m・平均3.85m・最小2.08である。石灯籠数は8基である。 建立年代は、1890年～1925年である。
18	**文化財** **その他**	文化財:(重文)太刀(銘:包永)、府天然記念物:楠木正行墓のくす。 府史跡:伝和田賢秀墓　伝楠木正行墓

3-2.四條畷神社の英文由来と現在

①**Worshiped Deity** : The Lord of Kusunoki-Masatura (1326?-1348) which was worshipped gods became Kenbiishi and Saemonnojou in Chakunan of the Lord of Kusunoki-Masashige (1294?-1336) and served as Kawatimori (Kani). Kusunoki-Masatura played an active part after death of father as "Nanchou-no-shou". 1348, Kusunoki-Masatura was killed by a fierce battle with the Ashikaga army in the land of shijounawate. The land of shijounawate is Junsetu are upcoming land of acquaintance for "loyalty, junkou and justice" with lineage-Masashi. 1897, Emperor Meiji was reading the Junsetu of place which is not inferior to the Father of Kusunoki-Masatura of Worshipped God "Juu2i" is tuizou.

②**Defeat in the Battle :** Extending from the start (1336) years May 25, father of Kusunoki-Masashige Duke was own blade in the "Battle of Minatogawa". Father of Kusunoki-Masashige-Lord will strike to kick-off, has been kick - off to tell goodbye at 11 years of age of the child is a Kusunoki-Masatura-Lord and Sakurai Station (now Mishima-gun Shimamoto-cho). Child (Shounan-kou) which followed teachings of father (Dainan-kou) persuaded in "parting of Sakurai Station" firmly played a key role of the Nanchou and young the 97th Emperor Gomurakami (1339-1368) was protected and was fought for justice. Shounan-kou was trying to commit suicide by chasing after more than sadness when you look at the neck of the father (Dainan-kou · Kusunoki-Masashige) that has been sent from the Ashikaga Takauji. Shounan-kou is to rouse been admonished and people crowded the Testament to the mother, to protect the legitimate emperor, it has been a Shukugan the forces hostile to the court. It is a child (Shounan-kou often tore an enemy by the aggressive tactics.1347, Shounan-kou, in the battle of the current (Uriwarinishi, Hirano-ku, Osaka), was hit several times the enemy. Shounan-kouh fought against 80,000 big armies which Kou-No-Moronao and Moroyasu led with 3,000 soldiers in Shijonawate and, after a fierce battle, was defeated. Kusunoki-Masatoki and Shounan-kou brother for that have been suicide, die in battle (23 years old) who Sashichigae.

③Philanthropic Spirit：1348, Kusunoki-Masatura public that places Honjin to Oujouin of Hiraoka led the soldiers of 3000, is once northward, Defeat vanguard of Kou-no-moronao that set up in higashi-nozaki of Hukanoike, advance to the Shijounawate did. The Kusunoki-Masatura forces thought whether you approached the headquarters of Kou-no-moronao, and you killed Kou-no-moronao, but were a ringer named Ueyama-Bou. Kusunoki-Masatura Duke, a large number of enemy soldiers to rout is, was raised salvation saw the drowning and falling from Watanabehashi (Gen / Chuuoukuten mahashi), to give a Koromo-yaku to those freezing in the cold, sent back to Kyouto by the scratch of allowanceIt was. (Nightingale, without distinction of enemy and ally, about 500 years was nursing a wounded soldier is also a previous story). "Philanthropic spirit" that the Red Cross spirit of the West came into Japan Become a Meiji, became both the foundation that is acceptable to the Japanese.

④Natural Monument of Osaka:

Ashikaga Takauji was surprised at defeat of degrees and let 80,000 big armies face a commander-in-chief in confidential Kou-no-Moronao and Moroyasu.

The Lord of Kusunoki-Masatura prepared for death for this fight and visited the temporary palace of Yoshino and expressed it in The 96th Emperor Godaigo (1339-1368).

In on this occasion, the enemy also attacked attracting large army. Fight from seeing the emperor of your face at the end of memories

The cemetery of Shou-Nankou is the place that was a dike of Fukano-pond.

The camphor tree is now grown into a stem around 10m or more of the large tree, it has been designated as a natural monument of Osaka.

⑤Tradition: Keio 4 (1868) years, kawachi · Shijōnawate-city of Sumiyoshi-Hirata-Zinja of Kannushi et al and started Kusunoki-Masatura, had asked permission of the founding of the shrine which enshrined the spirits of Junji in Wada-Kenshuu et al., "Battle of Shijōnawate".

1876, there area to Zikariya of "Junsetu", was allowed add and presented a "Jusanmi".
In Meiji 22(1889) year, Shijonawate Shrine was estimated as shrine foundation than Governor of Osaka Prefecture, and it was done line case by "Bekkakukanpeisha".
Furthermore, Shinto shrine foundation and a firm's name of "Shijonawate Shrine" were given than the Emperor Meiji and were done line case in Bekkakukanpeisha.
1890, has established a killer whale to "imori" Piedmont is the east of your tomb, was founded sitting.
⑥Structure：Shrine was enshrined in 1890. The scale of the is front 4.21m, lateral 6.47m and 27.24m2 in area. Architectural style: Nagare-zukuri. Foundation Era: 1890. Scale of the haiden is a front 9.53m, 5.89m side and the area 56.13m2. Architectural style: Nagare-zukuri. Foundation Era: 1924. Mioya shrine of Sessha is the Nagare-zukuri of architectural style, was built in 1924. Massha is Kusunokiten Shrine and Agen-Shoukonsha.
One Shinmei torii (2, Heisei (1990) age is nuki:3.91m, kasagi:4.77m. Two Myōjin torii (the 12, Showa (1937) age is nuki:4.73m, kasagi:5.86m. Three Myōjin torii (the Meiji 25(1892) age is nuki:5.18m, kasagi:6.51m. The number of the stone tourou is eight engines. It is 1890 through 1925 in the erection generation of the stone tourou.
Osaka Prefecture natural monument is a Kusunoki of Kusunoki-Masatura tomb. Important Cultural Property is (Ōdachi Mei "Kanenaga"). A historic spot of Osaka is biography Wada-Kenshuu grave and biography Kusunoki-Masatura grave.

表 3-2.大阪府四條畷市、四條畷神社の詳細資料(英文)

1	Worshipped God	Shou-Nankou Kusunoki-Masatura(Another name：Shou-Nankou)．「juu3i」、Kusunoki-Masatura-Lord
2	Shirine Foundation	Meiji 23(1890) year
3	Worshiped Deity	Haishi(Arranged) is 24 of them of the officer and man who is the Kusunoki whole families. ①Kusunoki-Masatoki、②Kusunoki-Masaie、③Kusunoki-Masaie of son, ④Wada-Kenshuu、⑤Kusunoki-Masatomo.
4	Shirine Ranking	Betukaku-Kanpeisha Beppyou-Zinja
5	Annual Festival	Tukinamisai：Every month 1.15 days、Junsetu-Sai：February 12、A spring festival: April 5、An autumn festival: October 5
6	Junpai	Kenmu-Chuukou-15-Sha of 1-Sha Naniwa-7Koumeguri The 61st of Shinbutsu-reijou
7	Chief Priest	Chief priest is Osaka Mayor of shrine agency of the Terai-Tanenori. Gonnegi is Minamii-Hiroya
8	Site	575-0021 2-18-1, Minamino, Shijonawate-shi, Osaka
9	Access	JR katamachi line "Shijonawate" walk about 16 minutes from the station
10	Latitude	34° 43’57″ N, 135° 38’57″ E.
11	Elevation	61m
12	TEL・FAX	TEL072－876－0044 and FAX 072－879－2888
13	Honden Shrine	The scale of the is front 4.21m, lateral 6.47m and 27.24m2 in area. Architectural style: Nagare-zukuri. Foundation Era: 1890.
14	Haiden	Scale of the haiden is a front 9.53m, 5.89m side and the area 56.13m2. Architectural style: Nagare-zukuri. Foundation Era: 1924.
15	Keidai Massha	The scale of Mioya shrine of Sessha, is a front 2.54m · side 3.51m · area 8.92 square m2, architectural style: flow building. Foundation Era: is 1924.Scale of

		Kusunokiten shrine of Massha is a front 1.78m · side 1.93m · area 3.44 sq m. Scale of Agen-Shoukonsha of Massha is a front 2.96m · side 2.66m · area 7.87 sq m.
16	Torii	One Shinmei torii (2, Heisei (1990) age is nuki-length 3.91m, kasagi 4.77m. Two Myōjin torii (the 12, Showa (1937) age is nuki-length 4.73m, kasagi 5.86m. Three Myōjin torii (the Meiji 25(1892) age is nuki-length 5.18m, kasagi 6.51m.
17	Stone Tourou	The number of the stone tourou is eight engines. It is 1890 through 1925 in the erection generation of the stone tourou. The height of the stone tourou is a max 5.98m · average 3.85m · minimum 2.08m.
18	Cultural Property	Osaka Prefecture natural monument is a Kusunoki of Kusunoki-Masatura tomb. Important Cultural Property is (Ōdachi Mei "Kanenaga"). A historic spot of Osaka is biography Wada-Kenshuu grave and biography Kusunoki-Masatura grave.

3-3.大阪府四條畷市、四條畷神社の韓文由来と現在

제신: 신사 주된 신인 구스노키 마사유키 (1326? -1348) 공은 구스노키 마사시게(1294? -1336) 공의 적남으로 게비이시、사에몬노죠가 되고、카와치 마모루 (관직)를 겸하게 되었다. 구스노키 마사유키는 아버지의 죽음 이후 남조의 장수로 활약했다. 그 후、쇼헤이 3 년(1348) 이곳에서 아시카가 군과위 전쟁에서 전사했다. 시조나와테 땅은 종족 장사와함께 충성, 효도, 정의를 위해 순절한 유래가 있는 땅이다. 메이지 30 년(1897) 메이지 천황은 아버지의 마사시게 공에 못지 않은 이곳의 충성을 기려、제신 마사유키 공에게 종 2 품이 수여되었다.

전투에서 패배: 엔겐원년(1336)5 월 25 일, 아버지의 마사시게 공은 미나토가와의 전투에서 할복했다. 출진에 있어 11 세의 아들 인 마사유키 공과 사쿠라이 역(현 미시마군 시마모토 쵸)에서 이별을 전하고 출진했다. 유훈은 「아버지의 죽음은 아시카가 요시아키 (막부 제 15 대 장군)의 천하가 될 것이지만、어디까지나 정통 천황을 따르라、그것이 아버지에게 효도하는 것이다」 (사쿠라이 역에있는 아들과의 이별비는 이 이야기에 감동한 영국 공사 파크스가 처음 세웠다).

사쿠라이 역의 이별을 논한 아버지의 유훈을 굳게 지킨 쇼우난공은 난쵸우카타의 중심이 되어 어릴 때부터 무라카미 천황을 수호해 정의롭게 싸웠다. 아시카가 타카우지가 보내온 아버지 마사시게 공의 목을 봤을 때 너무나 슬퍼 자해하려고 했다. 하지만 유훈을 어머니가 간곡히 설득해 분발하여、정통 천황을 지키고 조적정벌 (조정에 적대하는 세력)을 과제로 받게 되었다. 적극적인 전법으로 상당 수의 적을 물리쳤다. 쇼헤이 2 년(1347) 키우리우노(현 히라노구 우리와리서) 전투에서 몇 배의 적을 타격했다. 삼천명의 군사를 이끌고 코우노 모로나오, 모로야스가 이끄는 8 만 대군과 시조나와테 싸움의 격전 끝에 패배했다. 그래서 동생 쇼우지와 마사유키는 조건이 바뀌어 자해・전사(23 세)했다.

박애정신 :쇼헤이 3 년(1348) 삼천명의 군사를 이끌고 히라오카의 오죠우인에 본진을 둔 마사유키 공은 일거에 북진한 후 카노 연못의 히가시노캬키에 구축하고 코우노모로나오의 선두를 격퇴、시조나와케에 진출했다. 마사유키 군은 전군이 하나가 되어 돌진, 적군이 우와좌왕 했다. 한번은 사직의 본영을 습격해 전부 전멸시켰다고 생각했으나、참담한 광경이었다. 도망하는 수많은 적병이 와타나베 다리(현 오구바시)에서 떨어져 익사하는 것을 본 마사유키 공은 그들을 구조한 후 얼어 붙은 자에게 의약품을 주고 상처를 치료、교토에 돌려 보내게 되었다. (나이팅게일이 적이나 아군 구별없이 상처 입은 병사를 간호한 약 500 년 전의 이야기와 상통). 메이지 시대가 되어 서양의 적십자 정신이 일본에 들어왔을 때 「박애정신」이 일본인에게 받아 들여진 초석이 되기도 했다.

오사카 부의 천연기념물: 아시카가 다카우지는 번번한 패전에 놀라워 심복인 코우노 모로나오와 모로야수를 총대장으로 팔만 대군을 이끌게 했다. 마사유키공은 싸움에서 죽음을 각오하고 왕의 행궁에 참여하여 97 대 무라카미 천황(1339-1368)에게 「다음에는 적군도 대군을 끌고 쳐들어옵니다. 마지막 추억이 될것이니 황제의 얼굴을 알현하고 다녀오겠습니다」라고 말씀 드렸다. 천황은 「나는 너를 자신의 수족처럼 생각하고 의존하고 있다. 결코 무리한 일은 하지 말라」라고 말한 천황의 말씀에 감읍하여 선제 96 대 고다이고 천황(1318-1339)의 능을 경배한 후, 료이린당에 가서 일족 143 명의 이름을 걸고 하직의 노래를 남기고 출진하였다. 쇼난궁의 묘소는 후코오노 연못의 제방이었던 곳이다. 그 녹나무는 현재 둘레 10m 이상의 큰 나무로 성장, 오사카후의 천연 기념물로 지정되어 있다.

전승: 게이오 4 년(1868) 카와치국・현 시조나와테시의 스미요시 히라 신사 신관들이 마사유키를 비롯해 니기타켄슈 등 시조나와테의 싸움에서 남조에 순직한 쿠스노 일족 장병의 영혼을 모시는 신사의 창건을 청원했다. 메이지 9 년(1876) 순직한 지역은 지카리야가 되어 종삼품을 하사받았다.

메이지 10 년(1877) 경계를 넓혀 일대 비석을 세우고 메이지 천황 대 행차에 즈음하여 칙사를 내려 공의 충성을 기념하게 하고 금패를 하사했다. 메이지 22 년(1889) 오사카후 지사로부터 신사 창립과 시조나와테 신사를 천황명으로 받게되어 특별 관폐사에 열격 되었다. 또한 메이지 천황으로부터

신사창립과 「시조나와테 신사」의 사호가 내려져 특별 관폐사 (국가의 충신을 모신)에 열격되었다. 메이지 23 년(1890), 묘소의 동쪽, 이모리 산기슭에 사지를 정하고 창건 진좌 했다.

신사구조물: 메이지 23 년(1890) 진좌 되었다. 헤이세 2 년(1990) 스미요시 히라신사의 남쪽 땅에 창건하고、진좌 백년 봉축대제가 거행되었다. 헤세이 원년(1989) 본전을 시작으로 배전 등의 복구, 수무소의 신축、경내 지역의 제반 시설의 정비 확장을 했다. 건축 양식은 나가래 구조이다. 창건 연대는 메이지 23 년(1890)이다. 배전의 규모는 정면 9.53m, 측면 5.89m 와 면적 56.13m2 이다. 섭사의 미오야 신사는 나가래 구조, 다이쇼 13 년(1924) 창건이다. 말사는 쿠스노아마 신사와 아리하라쇼콘샤 신사다. 토리이는 3 개의 토리이다. 석등의 높이는 최대 5.98m 에서 수는 8 기.

表 3-3.大阪府四條畷市、四條畷神社の詳細資料(韓文)

1	**주제신**	구스노키 마사유키(별칭:쇼난코우) 증 종 2 품 구스노키 마사유키 경
2	**신사창건**	메이지 23 년 (1890)
3	**제 신**	구스노키 가문의 장사 24 기둥을 배제. ① 구스노키 마사도키 ② 구스노키 마사에 ③ 구스노키 마사에 자손 ④ 니기카겐슈 ⑤ 와다 마사토모 등이다.
4	**사격등**	별격 관폐사・벳표우 신사
5	**열 제**	2 월 12 일、순절제 1 월 5 일、춘대제 4 월 5 일、추대제 10 월 5 일
6	순배 등	켄무츄코우쥬고 신사의 하나 나니와 7 행복 나들이 신불영장 61 번
7	**궁 사**	궁사는 오사카후 신사청장인 테라이 타네노리 겸무、미나이히로야・곤네기
8	**진좌지**	５７５－００２１ 오사카후 시조나와테시 미나미노 2 쵸메 18 번 1 호
9	**교통수단**	JR 카타죠선「시조나와테」역으로부터 도보 약 16 분
10	**위 치**	북위 34 도 43 분 56.7 초 동경 135 도 38 분 57 초
11	**표 고**	61m
12	**전화・FAX**	TEL０７２－８７６－００４４ と FAX ０７２－８７９－２８８８
13	**본 전**	본전의 규모는 정면 4.21m, 측면 6.47m 와 면적 27.24m2 이다. 건축 양식: 나가래 구조. 창건연대: 메이지 23 년(1890)
14	**배 전**	배전의 규모는 정면 9.53m, 측면 5.89m 와 면적 56.13m2 이다. 건축양식 : 나가래 구조. 창건연대: 다이쇼 13 년(1924)
15	**경내말사**	섭사、미오야 신사의 규모는 정면 2.54m・측면 3.51m・면적 8.92 평방 m、건축양식은 나가래 구조. 창건연대: 다이쇼 13 년(1924)이다. 말사: 쿠스노아마 신사의 규모는 정면 1.78m・측면 1.93m・면적 3.44 평방 m 이다. 말사: 아리하라 쇼콘샤의 규모는 정면 2.96m・측면 2.66m・면적 7.87 평방 m 이다.
16	**토리이**	제 1 의 토리이(헤이세 2 년(1990) 본관에서 3.91m, 카사기에서 4.77m, 신명계에서 소리마시는 없다.제 2 의 토리이 (쇼와 12 년(1937) 본관에서 4.73m, 카사기에서 5.86m 소리마시 6.06m.제 3 의 토리이 (메이지 25 년(1892) 본관에서 5.18m, 카사기에서 6.51m 소리마시 6.71m.
17	**석 등**	석등의 높이는 최대 5.98m・평균 3.85m・최소 2.08 이다. 석등 수는 8 기 건립연대는 1890 년~ 1925 년이다.
18	**문화재 기타**	문화재: (중요문화재> 칼 (비문),후 천연기념물:구스노키 마사유키 무덤의 쿠스. 후 사적: 와다켄슈 묘 구스노키 마사유키 묘

3-4.大阪府四條畷市、四條畷神社の中文由来と現在

①祭神：此神社的主祭神楠木正行公（1326？-1348 年）是楠木正成公（1294？-1336）的嫡子，历任检非违使、左卫门尉，亦兼过河内守(官职)。楠木正行在其父死后，曾作为南朝的将军而活跃过。此后，于正平 3 (1348) 年在此地与足利军激战而战死。四条畷之地为与其宗族将士一起，为了忠诚、纯孝、正义而殉节的因缘之地。明治 30（1897）年，明治天皇嘉奖不逊于其父正成公的忠节，向祭神正行公追赠了从二位品位。

②战斗败北：延元元（1336）年 5 月 25 日，其父正成公在湊川之战切腹自杀。出阵之前，在与 11 岁的儿子正行公于樱井站(现三岛郡岛本町)离别之时，留下了遗训：“虽然父死后会成为足利义昭（幕府第 15 代将军）的天下，无论如何要守护正统的天皇，这才是对父亲的孝行”。(樱井站的别子碑就是英国公使帕克斯因这个故事感动而建立的。)

牢固地遵从了在樱井站分别时的父亲遗训的小楠公成为南朝方的中心，守护着年幼的后村上天皇，为了正义而战斗。看到足利高氏送来的父亲正成公的首级时，他也曾在悲痛之余想追随父亲而去。但是，母亲恳

切地提起父亲的遗训使他奋起，把征伐朝廷的敌人作为了自己的夙愿。他采取积极的战法屡次打败了敌人。正平 2（1347）年，在瓜生野(现平野区瓜破西)的战斗中打败了数倍的敌人。率三千人的兵力与高师直、师泰率领的八万大军大战于四条畷，激战败北。为此，其弟正时（23 岁）替正行而自杀讨死。

③博爱精神:正平3(1348)年, 率三千人的兵力在枚冈的往生院布了本阵的正行公一举北进，击破了在深野池的東野崎摆出阵势的高师直的先阵，进入了四条畷。正行军全军团结一致向前突进，在他们的奋战之下敌军纷纷向后退却，一度迫近了师直的本营，以为杀死了师直，却是叫上山某的替身。正行公看到败退的很多敌军士兵在渡边桥(现中央区天满桥)掉下溺水，命令救起，向因寒气而冷得发抖的人给予衣服与药品，治疗伤处并送至京都。这是南丁格尔不分敌我看护受伤士兵的约 500 多年前的故事。这也成为明治时期西洋的红十字精神进入日本，日本人接受了“博爱精神”的基础。

④大阪府天然纪念物：足利高氏对屡屡的战败深感震惊，派出了以心腹高师直与师泰为总大将的八万大军。正行公决心以死迎战，来到吉野的行宫参见天皇，向第 9 7 代后村上天皇（1339-1368 年）说道：“此次敌人也集聚了大军向我方进攻。我以最后的回忆来参见天皇陛下的龙颜”。天皇说道：“联信赖卿如自己的手足，绝对不要勉强行事”。正行公听到天皇说的话感激而泣，参拜了先帝第 96 代后醍醐天皇（1318-1339 年）的陵墓之后，来到如意轮堂留下了一族 143 人的名字，写下辞世之歌后毅然出征。小楠公墓地位于原深野池堤防所在地。其楠木现在已长成树干周长为 10 米以上的大树，被指定为大阪府的天然纪念物。

⑤传承:庆应 4(1868)年, 河内国•现现四条畷市的住吉平田神社神职们提出了创建供奉以正行为首的、和田贤秀等在四条畷的战斗中为南朝战死的楠一族将士的灵魂的神社的申请。明治 9(1876)年, 殉节的地区在字刈屋, 被追赠为从三位。明治 10(1877)年, 扩大了疆域，建立了一个大石碑, 在明治天皇行幸之际, 派遣敕使, 追感公的精忠，赏赐了金币。明治 22(1889)年, 大阪府知事宣布创立四条畷神社, 并列为别格官币社。而且，由明治天皇下诏创立神社，赐予“四条畷神社”名称，列于别格官币社(供奉国家的忠臣)。明治 23(1890)年, 将神社之地定在其墓地以东的饭盛山麓，并予以供奉。

⑥建筑物：供奉于明治 23(1890)年。平成 2(1990)年, 在住吉平田神社南隣之地创建，举行了供奉百年奉祝大祭。平成元(1989)年, 进行了正殿、拜殿等的修复，社务所的新建，境内地诸设施的修整扩张。建筑样式为流造, 创建年代为明治 23(1890)年。拜殿的规模为正面宽 9.53 米, 侧面宽 5.89 米, 面积 56.13 平方米。摄社御姚神社为流造, 创建于大正 13(1924)年。末社为楠天神社与有源招魂社。鸟居有 3 座。石灯笼的高度为最高 5.98 米, 个数为 8 座。

表 3-4.大阪府四條畷市、四條畷神社の詳細資料(中文)

1	主祭神	楠木正行（别称：小楠公），赠从二位，楠木正行卿
2	神社创建	明治 23（1890）年。
3	祭神	供奉楠木一族将士 24 柱神。①楠木正时，②楠木正家，③楠木正家儿子，④和田贤秀，⑤和田正朝，等。
4	神社等级	别格官币社，别表神社。
5	定期祭祀	2 月 12 日，殉节祭 1 月 5 日，春大祭 4 月 5 日，秋大祭 10 月 5 日。
6	巡拜等	建武中兴十五社的一社，浪花七幸巡，神佛灵场 61 番。
7	宫司	宫司由大阪府神社厅长寺井种伯兼任，南井广也・权祢宜。
8	供奉地	邮编：575-0021，大阪府四条畷市南野二丁目 18 番 1 号。
9	交通	JR 片町线“四条畷”站步行约 16 分钟。
10	位置	北纬 34 度 43 分 56.7 秒，东经 135 度 38 分 57 秒。
11	标高	61 米。
12	电话，传真	电话：072-876-0044，传真：072-879-2888.
13	正殿	正殿的规模为正面宽 4.21 米，侧面宽 6.47 米，面积 27.24 平方米。 建筑样式：流造。创建年代：明治 23(1890)年。
14	拜殿	拜殿的规模为正面宽 9.53 米，侧面宽 5.89 米，面积 56.13 平方米。 建筑样式：流造。创建年代：大正 13(1924)年。
15	境内末社	摄社御姚神社的规模为正面宽 2.54 米，侧面宽 3.51 米，面积 8.92 平方米。建筑样

		式：流造。创建年代：大正 13(1924)年。 末社：楠天神社的规模为正面宽 1.78 米，侧面宽 1.93 米，面积 3.44 平方米。 末社：有源招魂社的规模为正面宽 2.96 米，侧面宽 2.66 米，面积 7.87 平方米。
16	鸟居	一号鸟居建于平成 2(1990)年，贯上 3.91 米，横梁 4.77 米，为神明系无弯曲部。 二号鸟居建于昭和 12(1937)年，贯上 4.73 米，横梁 5.86 米，弯曲部 6.06 米。 三号鸟居建于明治 25(1892)年，贯上 5.18 米，横梁 6.51 米，弯曲部 6.71 米。
17	灯笼	石灯笼的高度为最高 5.98 米，平均 3.85 米，最低 2.08 米。石灯笼数为 8 座。 建立年代为 1890 年～1925 年。
18	文物及 其他	文物:(重文)太刀（铭：包永），府天然纪念物：楠木正行墓的楠木。 府史迹：传和田贤秀墓，传楠木正行墓。

4. 四條畷神社の社殿

御祭神:楠正行公（くすのきまさつら・小楠公)はじめ 25 柱

当社は鎌倉末期、皇位の継承が、公卿・幕府の思惑がからんでもつれたとき、不利を覚悟で一身をなげうつて飽くまで正統の天皇を守り、明治維新の原動力ともなつた楠正行公（大楠公)の嫡男で、父にも劣らぬ忠考両全、情厚く、智勇にすぐれた正行公（小楠公)を主神に弟、正時以下 24 柱を配祀する。明治天皇は、ことに楠公がお気入りで、正成分には正一位を追贈し、別格官幣社第一号として神戸湊川神社にお祭りになり、正行公には明治 30 年に従二位を追贈された。

御鎮座:これより先、地元の住吉平田神社の神主、三牧文吾らは、小楠公の殉死にのこの地に神社創建を熱心に願い出で、明治 22 年に勅許(ちょっきょ)がくだり、四條畷神社という社号がくだされ、別格官幣社（主に国家の忠臣を祭る)に列格された。里人喜び境内地や金品を寄進して、老も若きも土を運び石を積んで奉仕し、立派な社殿が完成し、明治 23 年 4 戸 5 日御鎮座祭を挙げた。

4-1.四條畷神社の社殿と本殿規模

写真 4-1.四條畷神社の本殿、全景、鏡および由来記　　写真 4-2.社務所

写真 4-1 は四條畷神社の本殿、全景、鏡および由来記である。四條畷神社の本殿は、明治 23(1890)年 4 月 5 日に建立、建築様式は「流れ造り」である。拝殿は、大正 13(1924)年 10 月 5 日に建立、建築様式は「流れ造り」である。御批社は、大正 13(1924)年 10 月 5 日に建立、建築様式は「流れ造り」である。四條畷神社の本殿の測量値として、間口 4.21m・側面 6.47m・面積 27.24 平方mである。拝殿の測量値として、間口 9.53m・側面 5.89m・面積 56.13 平方mである(**表 4-1**)。

	正面	側面	面積
本殿	4.21	6.47	27.24
拝殿	9.53	5.89	56.13
御妣神社	2.54	3.51	8.92
楠天神社	1.78	1.93	3.44
有源招魂社	2.96	2.66	7.87
MAX	9.53	6.47	56.13
AVG	4.20	4.09	20.72
MIN	1.78	1.93	3.44

単位:長さ(m)と面積(m^2)

表 4-1.四條畷神社社殿の規模

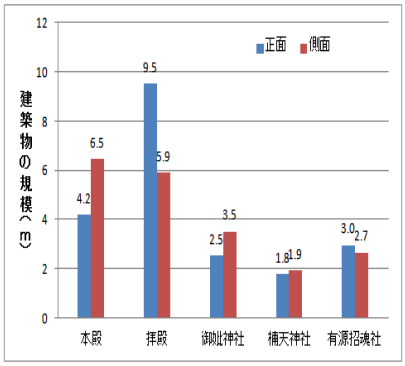


図 4-1.四條畷神社社殿の長さ

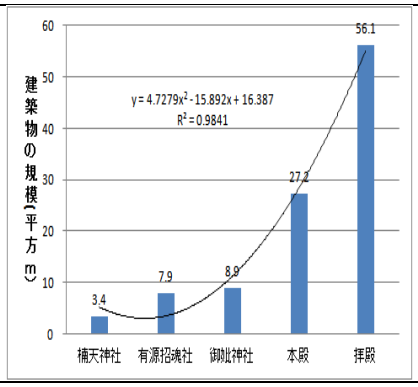


図 4-2.四條畷神社社殿の面積

一方、拝殿の正面は本殿より2倍以上であることが分かるが、逆に側面は小さい(**図 4-1**)。社殿の面積として、最大面積では、拝殿(56.13 平方m)で、次に大きい面積は本殿(27.24 平方m)である。御妣神社(8.92 平方m)、有源招魂社(7.87 平方m)および楠天神社(3.44 平方m)の順に減少の傾向であることが確認された(**図 4-2**)。

4-2.四條畷神社の拝殿規模

写真 4-3.四條畷神社の拝殿について、全景、フロアー、牛製和太鼓と碁盤状天井

写真 4-3 は、四條畷神社の拝殿について、全景、フロアー、牛製和太鼓と碁盤状天井である。

4-3.四條畷神社の摂社・御妣(ミオヤ)神社

鎮座地:四條畷神社神域。祭神:御祭神御母公。小楠公御母堂を祭る。大楠公亡き後、正行公を始め御兄弟を、正しく導き国家の忠臣として育てあげられた。賢母の教えを慕う地元の婦人達の願いにより、女性の鏡(カガミ)・子育ての大神として祭られる。大正 14 年 10 戸 5 日鎮座している。

四條畷の地は正平 3(1348)年 1 月 5 日、正行卿が忠烈無双の御宗族将士と共に誠忠、純孝、正義のため殉節せられた由縁の地である。その殉節の地域は同町字刈屋にあり、畏くも明治 9(1876)年には従三位を追贈せられ、翌明治 10(1877)年、境域を拡めて一大碑石を建てられた。同年 2 月、明治天皇大和行幸にあたり、同 17 日、勅使を差遣わせられて卿の精忠を追感あらせられ、特に金幣を賜う。是れより先、慶応 4(1868)年、同地の平田神社神主三牧文吾等は、殉節の地に神社創建を度々願い出で、その後有志達もしばしば懇請し、明治 20(1887)年 6 月、時の大阪府知事西村捨三より神社創立並に社号と、有志の創立願出あり、同年 6 月 29 日、願出の旨聴届けられて、同年 12 月 16 日には明治天皇より神社創立の勅許を仰ぎ、四條畷神社の社号宣下を賜い、別格官幣社に列格せられて、翌 23 年 4 月 5 日、御鎮座せられた。

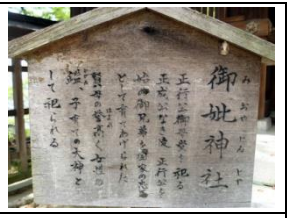


写真 4-4.四條畷神社の摂社・御妣(みおや)神社の石碑・社殿・由来文

写真 4-4 は、四條畷神社の摂社・御妣(みおや)神社の石碑・社殿・由来文である。御妣神社の正面は 2.54m、側面は 3.51mと面積は 8.92 平方mである。格式のランキングは、本社＞摂社(ｾｯｼｬ)＞末社(ﾏｯｼｬ)の順とされる。一般には、摂社はその神社の祭神と縁故の深い神を祀った神社である。末社はそれ以外のものと区別できる。本社の境内にあるものを境内摂社(ｹｲﾀﾞｲｾｯｼｬ)または境内社、境外に独立の敷地を持つものを境外摂社(ｹｲｶﾞｲｾｯｼｬ)または境外社という。明治から戦前までの近代社格制度では、摂末社とは、神社本社とは別に、その神社の管理に属する。末社とは、主祭神と関係のない神社で、主に他の神社から境内に招いた神様を祀ると考えられ、小規模な神社である。

4-4-1.末社・楠天(ｸｽﾉｷﾃﾝ)神社

写真 4-5.楠天神社の社殿

菅原(すがはら)道真(みちざね)公を祭る。俗に学問の神様と崇められる。文教・至誠の神。昭和 38 年 9 戸 25 日御鎮座。幕末の志士真木(まさき)和泉守(いずみのかみ)は常に菅公、楠公を崇敬し、君を思い慕(した)う純情を菅公によって養われ、一身一家を捨てて皇位を護持する情熱を、楠公によって鍛えられた。この思想が明治維新の主流となって聖業が達成されたのである。楠天神社の規模として、正面は 1.78m、側面は 1.93m であり、面積は 3.44 平方mである。当社は文教の守護神菅原道真公をお祀りしている。明治維新の方向を決する原動力となった真木和泉守は、歴史を単なる知識とせず、道義を明確する鏡として、常に菅公、楠公を崇敬し、君を思い慕う純情を菅公によって養われ、一身一家を棄てて皇位を護持する情熱を、楠公によって鍛えられ、この思想が遂に維新の主流となって、明治の聖業が完成されたのである。昭和38年9月25日鎮座(大阪天満宮より御分霊)、御祭神:菅原道真公である。

4-4-2.末社・有源招魂社

写真 4-6.有源招魂社の社殿と扁額

平成19年4月7日鎮座は、成人教学研修所より移設された。**御祭神は**天御中主大神、天照大神、大物主大神である。

有源招魂社の規模として、正面は 2.96m、側面は 2.66m であり、面積は 7.87 平方mである。**写真 4-6** は、有源招魂社の社殿と扁額である。

5.四條畷神社の鳥居測量と写真と数値解析

神社鳥居の区分と構造には、鳥居とは神霊として鳥を招く意味である。構造は 2 本柱に 2 本横木(笠木と貫)から構成。神明系と明神系の鳥居は、笠木の下に島木が無と有(装飾)の違い、笠木の反りの有(神明系)と無(明神系)による。明神系鳥居の貫には、出る(中山鳥居を除く)と出ない(中山鳥居)のが区分できる。神明系鳥居の貫には、出る(鹿島鳥居を除く)と出ない(鹿島鳥居)に区分できる。神明系鳥居は次の4タイプがある。

四條畷神社の鳥居には、稲荷系神社と明神系鳥居がある。稲荷(いなり:台輪(ﾀﾞｲﾜ)形である。稲荷(いなり:台輪は、島木の下に構造的補強した大輪形。柱の上部、島木と接する箇所に台輪がある特徴とし、台輪鳥居と呼ぶ。明神系鳥居の系列と構造と類似鳥居との関係を次のように要約できる。柱は丸柱・内傾斜、反り増しは有、笠木は角型曲線、島木は角型曲線、台輪は有、楔は有、額束は有、貫は角型外側、根巻・藁座は無、亀腹・饅頭は有、構造の笠木・島木は斜め切断されている。**写真 5-1** は四條畷神社正面の 1 の鳥居、明神系鳥居と偏額である。

5-1.四條畷神社の鳥居の写真

写真 5-1.神明系である 1 の鳥居と由来	写真 5-2.明神系 2 の鳥居	写真 5-3.明神系の 3 の鳥居と偏額

写真 5-1 は、四條畷神社の神明系である 1 の鳥居と由来である。社殿前の木造り「神明鳥居「は、平成 2(1990)年 4 月に建立、神宮より拝受された。**写真 5-2** は、四條畷神社にある明神系 2 の鳥居である。階段下にある石造の「明神鳥居」は、昭和 I4(1939)年 4 月に建立、富国徴兵保険相互会社より寄贈によるものである。**写真 5-3** は明神系の 3 の鳥居と偏額である。国道脇にある石造の「明神鳥居」は、明治 25(1892)年 5 月に建立、大阪朝日新聞株式会社より寄贈された。

5-2.四條畷神社の鳥居の測量値

表 5-1 は、四條畷神社の鳥居測量である。四條畷神社の鳥居は神明系で一の鳥居、明神系の二の鳥居と三の鳥居である。神社の鳥居に対して、柱断面(円周と直径)、柱内側の幅(柱内側間と中心間)、貫高さ(下点と上点)、笠木高さ(下点と上点と頂点)を区分して計測資料を表示している**(表 5-1)**。

柱間距離では、最大値は三の鳥居(4.89m)、平均値は 4.50m と最小値は一の鳥居(3.99m)である。貫上の高さでは、最大値は三の鳥居(5.18m)、平均値は 4.61m と最小値は一の鳥居(3.91m)である。笠木上の高さでは、最大値は三の鳥居(6.51m)、平均値は 5.71m と最小値は一の鳥居(4.77m)である。反り増しの高さでは、最大値は三の鳥居(6.71m)、平均値は 6.39m と最小値は二の鳥居(6.06mである(**図 5-1**)。

表 5-1.四條畷神社の鳥居の測量値(m)

鳥居名称	柱の円周	柱の直径	柱内側間	貫の下	貫の上	笠木の下	笠木の上	反り増し
一の鳥居	1.41	0.45	3.99	3.76	3.91	4.41	4.77	無
二の鳥居	1.95	0.62	4.61	4.58	4.73	5.51	5.86	6.06
三の鳥居	2.07	0.66	4.89	5.03	5.18	6.15	6.51	6.71
最大値	2.07	0.66	4.89	5.03	5.18	6.15	6.51	6.71
平均値	1.81	0.58	4.50	4.46	4.61	5.36	5.71	6.39
最小値	1.41	0.45	3.99	3.76	3.91	4.41	4.77	6.06

ここでは、四條畷神社にある3基の鳥居について測量値を行った。**図 5-1** は四條畷神社鳥居の柱間距離と笠木高さとの関係図のデータである。X表示は笠木上で、▲表示は笠木下のデータである。四條畷神社の 3 基鳥居の柱間距離と笠木の高さの関係を究明するため考察方法として、次のような 2 変数(X とY)の直線回帰方程式を与えられる。ここで、X は柱間距離で、Y は笠木の高さ、決定係数は R^2 である。

Y(笠木上の高さX) = 1.904(柱間距離) -2.849……決定係数(R^2 =0.995) …測量値……(5-1)
Y(笠木下の高さ▲) =1.907(柱間距離) -3.218……決定係数(R^2 =0.996) …測量値……(5-2)

笠木上と笠木下の勾配は、1.904 と 1.907 で、その差は 0.003 である。笠木上の勾配は笠木下より小である。笠木の上下の決定係数は共に 0.995(上)と 0.996(下)であることが判明された。

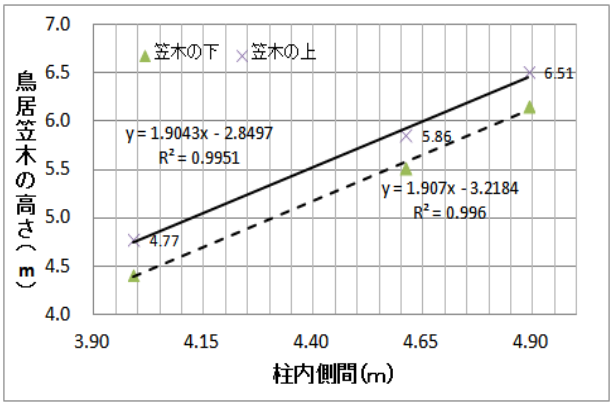


図 5-1.四條畷神社の笠木の測量図(m).

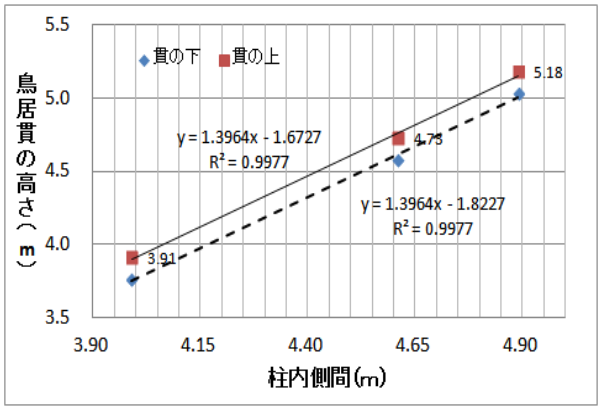


図 5-2.四條畷神社の貫の測量図(m).

図 5-2 は四條畷神社鳥居の柱間距離と貫高さとの関係図のデータである。■表示は貫上で、◆表示は貫下点のデータである。四條畷神社の 3 基鳥居の柱間距離と貫の高さの関係を究明するため考察方法として、次のような 2 変数(X と Y)の直線回帰方程式を与えられる。ここで、X は柱間距離で、Y は貫の高さ、決定係数は R^2 である。

Y(貫上の高さ■) =1.396(柱間距離) -1.673 ……決定係数(R^2 =0.998) …測量値……5-3)
Y(貫下の高さ◆) =1.396(柱間距離) -1.923 ……決定係数(R^2 =0.998) …測量値……(5-4)

貫上と貫下の勾配は、1.396 と 1.396 で、その差はゼロである。貫の決定係数は共に 0.998 であることが判明した。

6.四條畷神社の石灯籠と考察

石灯籠の部分名称は、上からの部分名称として説明を行う。笠は火袋の屋根になる部分である。六角形や四角形が主流であるが雪見型の円形などもある。多角形の場合は宝珠の下部分から角部分に向かって線が伸び、突端にわらび手という装飾が施されることもある。火袋は、灯火が入る部分で灯籠の主役部分である。装飾目的の場合は火をともすことは無いが、実用性が求められる場合には火や電気等により明りがともされる。

円筒状が一般的であるが、四角形、六角形、八角形のものも見られる。 基礎 最下部の足となる部分である。六角形や円形が主流である。雪見型灯籠などでは 3 本や 4 本の足で構成される。灯籠の代表的な種類は、春日型…神社仏閣で多く見られるもので実用性も高い。竿が長く火袋が高い位置にあるのが特徴である。笠の丸い丸雪見と六角形の六角雪見がある。**図 6-1** は、現在の八尾市、四條畷神社の石灯籠の配置図で、詳細については次のように説明できる。

写真 6-1.社務所前

写真 6-2.西北端

写真 6-3.階段の上部にある左右の灯籠

境内にある**写真 6-1** は社務所前であり、**写真 6-2** は西北端の森林の前である。**写真 6-3** は階段の上部にある左右の灯籠である。社務所玄関前にある「灯」は、明治 32(1899)年 12 月に建立。階段上にある「灯籠」は、明治 23(1890)年 3 月 に建立。社務所前山側 にある「灯籠」は、大正 14(1925)年 10 月 に建立。階段下にある「灯籠」は、 明治 23(1890)年 12 月に建立。国道脇にある「灯籠」は、明治 25(1892)年 5 月に建立である。

写真 6-4.二の鳥居横にある左右の灯籠

写真 6-5.三の鳥居横にある左右の灯籠

番号	場　所	高さ	建　立
1	社務所前	2.08	明治32(1899)年
2	社務所山	3.85	大正14(1925)年
3	階段上左	2.76	明治23(1890)年
4	階段上右	3.27	明治23(1890)年
5	階段下左	3.25	明治23(1890)年
6	階段下右	3.64	明治23(1890)年
7	国道脇左	5.97	明治25(1892)年
8	国道脇右	5.98	明治25(1892)年
MAX		5.98	大正14(1925)年
AVG		3.85	
MIN		2.08	明治23(1890)年

表 6-1.石灯籠の計測値

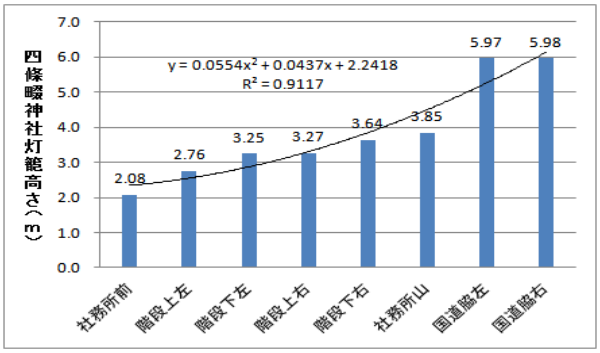


図 6-1.四條畷神社の石灯籠の計測値図

表 6-1 は四條畷神社の8基灯籠の計測値である。灯籠の最大値は 5.98m、平均値は 3.85m、最小値は 2.08m である。その差は 3.9mである。**図 6-1** は神社の石灯籠の配置順である。この図は放物線状になっているようで、漸次に増大の傾向であることが判明できる。四條畷神社の石灯籠の計測値順でとして、計測値の2.0m代は 2 基、3m代は 4 基である。さらに、4m代は 2 基である。すなわち、3 段階に分類できる。

四條畷神社の境内建築物と周辺にある灯籠の高さとの関係図のデータである。四條畷神社の境内建築物と周辺にある灯籠の高さとの関係を究明するため考察おこなった。その方法として、次のような 2 変数(X とY)の 2 次回帰方程式(践線)を適用した。ここで、X は境内建築物で、Y は灯籠の高さである。決定係数は R^2 である。

Y(灯籠の高さ)= $0.055X^2+0.0437X+2.242$……決定係数(R^2 =0.912)　…測量値……(6-1)

2変数(X とY)の 2 次回帰方程式の決定係数は、実践の 0.912 から一定の傾向が確認できた。

7.おわりに

7-1.南北朝時代の楠正成・大楠公(ﾀﾞｲﾅﾝｺｳ)

南朝の将として戦い、四條畷の戦いで敗死した楠木正行を主祭神としている。父の楠木正成が大楠公(だｲﾅﾝｺｳ)と呼ばれるのに対して、嫡男の楠木正行は小楠公(ｼｮｳﾅﾝｺｳ)と呼ばれるが、地元四條畷市民や近接地に住む大東市民の間で単に「楠公さん」と言えば正行や当社を指す場合が多い。1975 年(昭和 50 年)には「楠公」という町名まで誕生し、他にも周辺に楠公と付く地名が複数誕生している。http://ja.wikipedia.org/wiki/

表 7-1.南北朝時代の武将・四條畷の戦いで敗北

楠木**正行**(まさつら)　:正成の嫡男	楠木**正時**(まさとき):正成の次男	楠木**正家**(まさいえ):楠木正成の一族

和田**賢秀**(けんしゅう):正季の五男	和田**正朝**(まさとも):和田賢秀の弟	和田**正頼**(まさのり):正成の従兄弟

配祀は**楠木正時**(まさとき)・[配祀]**楠木正家**(まさいえ)・**和田賢秀**(けんしゅう)※[別名]源秀:南北朝時代の武将、楠木正成の弟で、楠木正季(まさすえ)の五男(末男)・**和田正朝**(まさとも)和田賢秀の弟・和田紀六左衛門(きろくざえもん)※[別名]和田**正家**(わだまさいえ)阿間了願(あんまりょうがん)、[別名]楠木**正頼**(くすのきまさより)、楠木正成の従兄弟、青屋刑部(あおやぎょうぶ)・他楠木一族:楠木正家子息・和田紀六左衛門子息 2 柱・大塚惟久・畠山與三職俊・畠山六郎・野田四郎・野田四郎子息 2 柱・金岸(某)・金岸(某)弟・關住良圓・關住良圓子息・三輪西阿・三輪西阿子息・河邊石掬丸・誉田(某)

7-2.南北朝時代の権力

表 7-1 は、南北朝時代(96代から102代、北朝初代～6代)において、南朝(大覚寺統)の 96 代後醍醐天皇と北朝(持明院統)の関係を表示した。1331年、赤坂城の戦、鎌倉幕府軍対楠木正成が逃亡された。それによって、北朝 1 光厳天皇は南北朝天皇に成っている。1332 年、正成逃亡翌年は、北朝の政権であった。1333年、元弘の乱と千早城の戦い、**楠木正成**と鎌倉幕府軍の対立である。その結果、楠木正成が南朝勝利し、鎌倉幕府を滅亡させた。1335 年、中先代の乱で、南朝が勝利した。1336 年、湊川の戦いで北朝勝利、楠木正成死亡した。1348年、四條畷の戦い北朝勝利、楠木正行死亡した。

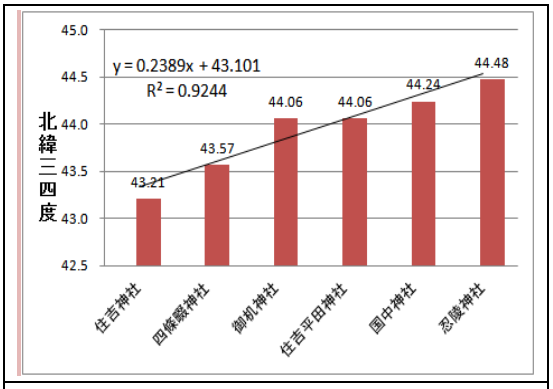


図 7-1.四條畷神社関連の北緯

7-3.四條畷神社の経緯度の考察

図 7-1 は、四條畷神社(北緯 34 度 44 分 59.6 秒 東経 135 度 33 分 2.6 秒)と関連があると思われる神社と経緯度との関係を考察した。ここでは、北緯 34 度 20 分から 35 度 20 分間の値を縦軸(Y 軸)として、四條畷神社に近い神社をプロットした。

謝 辞

論文作成時には、四條畷神社の宮司は大阪府神社庁長であり寺井種伯(タネノリ)兼務、権禰宜は南井広也から助言を頂きました。大阪府神社庁の関係各位に感謝申し上げます。

(2014 年 12 月 1 日受稿、2015 年 1 月 25 日掲載決定)

参 考 文 献

1)安津素彦・梅田義彦編集兼監修者:『神道辞典』神社新報社、1968 年。
2)平泉 澄:『楠公-その忠烈と餘香』、鹿島出版会、1973 年。
3)白井永二・土岐昌訓編集:『神社辞典』、東京堂出版、1979 年。
5)楠 孝雄:『楠公兵法と防長の心』、ぎょかせい、1982 年
6)森田康之助:『楠木正成-美しく生きた日本の武将』、新人物往来社、1984 年。
7)佐藤和彦編:『楠木正成のすべて』、新人物往来社、1989 年。
8)斎城昌美:『青嵐-楠木正行の生涯』、中央公論新社 1999 年。
http://osakadai3shibu.kilo.jp/jinja/sijounawate/jinja/sijounawate.html 北河内のお宮
ja.wikipedia.org/wiki/。jinjajin.jp/modules/newdb/。https://foursquare.com/v/。
nttbj.itp.ne.jp/0728760044/index.html。www.jinjacho-osaka.net/osakafunai-no-jinjya/dai3sibu/。

別表.四條畷神社年表

和歴	西暦	四條畷神社年代順の内容

正応元	1228	96代後醍醐天皇の生誕:正応元(1228)-延元 4(1339)
永仁 02	1293	初めは利根川流域に基盤をもつ東国武士の有力集団の一派。鎌倉幕府が 1293 年に楠木村を鶴岡八幡宮に寄進したという記録があるうえ、当時幕府の有力御家人だった長崎氏の出自は楠木村の隣の長崎郷で河内に領地を保有していた。その関係で楠木氏が河内に移った。。
永仁 02	1294	楠正行の父の正成は河内国赤坂に誕生-1336 年死亡。
延慶元	1308	元服し、名を楠正成(15 歳)と改名。
文保 02	1318	96代後醍醐天皇の在位期間(1318-1339)
元応元	1319	南北朝時代(96～102代)、南朝の後醍醐天皇(96代)と北朝の96代後醍醐天皇
元応 02	1320	南北朝時代(96～102代)、南朝の後醍醐天皇(96代)と北朝の96代後醍醐天皇
元亨 02	1322	正成(29歳)、紀伊保田荘の湯浅氏を討伐。
嘉正元	1326	楠正行、河内国赤坂に誕生。-貞和 4(1348) 当時11歳 父の「桜井の別れ」
元徳 02	1330	南北朝時代(96～102代)、南朝の 96代後醍醐天皇(1318-1339)と北朝の後醍醐天皇、二条町の仮屋でで穀物を販売する、楠正成(37歳)。
元弘元	1331	5月元弘の乱。8 月天皇、笠置に逃れる。9月楠正成(38歳)、河内国赤坂城で
元弘 02	1332	南北朝時代(96～102代)、楠正成(39 歳)。南朝の光厳天皇と北朝 1 の光厳天皇。3 月幕府が後醍醐天皇(1318-1339)を隠岐へ送る。11 月護良親王、吉野へ挙兵、千早城に挙兵。12 月赤坂城で挙兵。
元弘 03	1333	南北朝時代(96～102代)、南朝の 96代後醍醐天皇(1318-1339)と北朝の後醍醐天皇。 1 月河内、和泉の守護地頭を打ち破る。天王寺に陳を張る。赤松則村が播磨国で挙兵。 2 月幕府軍、赤坂城を攻める、千早城を攻める、赤坂城落成する。 6 月七千騎を率いて兵庫に迎える。天皇、京都に帰られる。
建武元	1334	南北朝時代(96～102代)、南朝の 96代後醍醐天皇(1318-1339)と北朝の後醍醐天皇
建武 02	1335	南北朝時代(96～102代)、南朝の 96代後醍醐天皇(1318-1339)と北朝の後醍醐天皇。**中先代の乱:井手の沢の戦い(武蔵国)**など。-1336 年、延元の乱:矢作川の戦い(三河国)、手越河原の戦い(駿河国)、箱根・竹ノ下の戦い(駿河国)、千田荘の合戦(下総国)
延元元	1336	南北朝時代(96～102代)、南朝の光厳天皇と北朝 2 の光明天皇。1 月官軍(天皇側)と足利軍と**戦**う。足利尊氏、京都に入る。2 月尊氏は九州へ逃れ、4月九州博多から攻め上がる。豊島河原合戦(摂津国)、多々良浜の戦い(筑前国)、**湊川の戦い(摂津国)**、5月 25 日父正成が兵庫湊川で足利尊氏と激戦で敗れて自害・死亡。96代後醍醐天皇(1318-1339)が吉野に移られ、正成(11 歳)は天皇を守るため、吉野の朝廷、始まる。**楠正行の父の正成(43 歳)**
延元 02	1337	南北朝時代、金ヶ崎の戦い (越前国)
延元 03	1337	南北朝時代、青野原の戦い(美濃国)、**石津の戦い(和泉国)**、藤島の戦い(越前国)、-1343 年常陸合戦(常陸国)。1338 年、青野原の戦い(美濃国)
延元 04	1339	96代後醍醐天皇(1318-1339)が吉野の崩壊・死没。後、義良新王が 97 代後村上天皇(1339-1368)即位。敵も大軍を集めて攻めた。正成(14 歳)。
延元 05	1340	南北朝時代(96～102代)、正成(15 歳)。南朝の 97代後村上天皇(1339-1368)と北朝 1 光厳天皇(1332-1334)と北朝 2 光明天皇(1336-1348)。
正平 02	1347	正成(22 歳)、8 月墨田城を攻略。9 月藤井寺で(藤井寺の戦い)と 11 月の天王寺で、瓜生野の戦いで細川顕氏をを破る。12 月天皇に拝謁する。父正成公ゆずりの見事な打撃をあたえた。
正平 03/ 貞和 04	1348	正成(23 歳)、**南北朝時代、**1月5日**四條畷の戦い(河内国)**で、深野池の東野崎に構える高師直率いる幕府軍との**戦いで、**四條畷に進出し、師直を討ち果たしたかと思ったが、上山某なる替玉であった。**楠木正行の死没**(2月4日)。 南朝、誠忠純孝正義のため殉節御昇神あらせる土地の人「南無権現」と刻み、小さき自然石の碑を建て、若き樟の樹を其両側に植えて以て公の御遺徳を追慕景仰したりしが、二本の楠樹は年経て合して一株となり、小碑は其の中に包まれて地中に埋れ、御祭神と共に殉節せられたる宗族部将

		24 将士の氏名を刻みたる四條畷表忠碑は、元老院議官税所篤によりて。
貞和 06	1350	-1352 年、南北朝時代、観応の擾乱。
応安元	1368	97 代後村上天皇の在位期間(1339-1368)
永禄 02	1559	11 月 20 日に楠木氏は正親町天皇より朝敵の赦免を受け。後に正虎は能書家として織田信長や豊臣秀吉からも重用された。正虎の家系は北畠氏に仕えた伊勢の国人・楠(くす)氏の末裔が河内に移住して正成の末裔を名乗り、正成との血縁関係はないとも言われている。
永禄 11	1568	足利義昭(幕府第 15 代将軍、1568-1588)
文化 6	1809	九月、松生鰭文齢石碑を建てて御祭神の忠勇義烈を欽慕し奉る。
明治 8	1875	内務卿大久保利通公特にこの地を弔慕せられ、枯草茫々として参路もさだかならざりしを憂ひ給ひ國家の大忠臣、臣子の儀表と仰ぐべき小楠公御昇神の地をみて歎く久しくせられ、税所堺縣令又地方民達非常に感奮して直に有志相謀り、資材を献じ、土地を寄せて僅に 1 畝十參歩なりし塋域を懐張整理して壱千五拾四坪となりし更に一大墓碑を建設せり。其の高さ 15 尺にして方 5 尺、碑面の「贈從三位楠正行朝臣之墓」の文字は、大久保利通公自ら謹書。
明治 09	1876	従三位を追贈、從三位の御贈位あり、同 27 日勅使參向あらせられ。
明治 10	1877	明治天皇大和行幸の際道明寺行在所より勅使を御差遣いあらせられ金幣を賜ひ忝き宣旨さへ下し賜へり。
明治 11	1878	南野村飯盛山の山麓にある住吉平田神社の神職らが中心となり、楠木氏らを祀る神社の創建を願い出た。三日間除幕式建碑遷靈祭を行ひたり。
明治 18	1885	大墓碑の後に親建、其の英靈を弔び、是より先、御祭神の大墓碑未だ成らざるに先立ち
明治 22	1889	明治維新の後、住吉平田神社の神主三牧文吾氏らは小楠公自刃の地四條畷に、神社創建を熱心に願い出、6月に、再三懇請、当時大阪府知事であった西村捨三氏より明治天皇に神社創立並に、社号の願出と有志の創立願いが、6 月 29 日旨聞き届けられた
明治 22	1889	12 月 16 日に明治天皇より神神社創立と社号を与えられた。別格官幣社(主に国家の忠臣を祀る)に列格され、社号『四條畷神社』で創建された。
明治 23	1890	地元の人々は、土地や金品の寄進と奉仕によって、本殿を建立。建築様式は流れ造り。4 月 5 日御鎮座祭が斎行された。御墓所の東、飯盛山麓に社地を定めてから、創建鎮座し，正行を主祭神とした。住吉平田神社の南隣の地に創建。階段上の灯籠。階段下の灯籠。
明治 25	1892	石造りの鳥居、大阪朝日新聞株式会社、国道脇。国道脇の灯籠。
明治 28	1895	北白川宮恒久王殿下外二殿下御參拝幣帛を捧げらる
明治 30	1897	明治天皇は、父正成公に劣らぬ所の忠節を嘉せられ、主祭神の正行公には、4 月 6 日に従二位が追贈せられた。御祭神 550 年臨時大祭執行に就き宮内省より特に幣帛を賜ひ奉幣使として大阪府知事内海忠勝を参向せしめ給ふ。伏見宮文秀女王殿下御參拝
明治 32	1899	社務所玄関前の灯籠。
明治 36	1903	常宮周宮兩内親王殿下御代拝として海軍大佐佐々木高志参向せらる
明治 37	1904	日露戰宣奉告勅使として大阪府知事を参向せしめらる
明治 38	1905	日露平和克復報告勅使として大阪府知事を参向せしめらる
大正 03	1914	日獨戰宣奉告勅使として大阪府知事を参向せしめらる
大正 04	1915	大嘗祭に付勅使として大阪府知事を参向せしめらる
大正 09	1920	日獨平和克復報告奉告勅使として大阪府知事を参向せしめらる
大正 10	1921	久邇宮邦彦王殿下御參拝
大正 13	1924	御妍社と拝殿を建立。建築様式は流れ造り。
大正 14	1925	社務所前の山側灯籠
昭和 03	1928	大嘗祭奉告勅使として大阪府知事を参向せしめらる

昭和 04	1929	今上天皇陛下大阪府行幸の際御使として侍従子爵牧野貞亮を御差遣あらせ給ふ
昭和 06	1931	秩父宮同妃兩殿下御參拜、閑院宮載仁親王殿下御參拜
昭和 10	1935	大楠公 600 年祭時に、ついに確認された楠木氏子孫によって、湊川神社内に楠木同族会が結成されて現在に至っている。
昭和 14	1939	石造りの鳥居、富国微幣保険相互会社、階段下。
昭和 37	1962	三重県上野市（現・伊賀市）の旧家から発見された上嶋家文書（江戸時代末期の写本）によると、伊賀、服部氏族の上嶋元成の三男が猿楽（能）の大成者である観阿弥で、その母は楠木正成の姉妹であるという。
平成元	1989	御本殿を始め拝殿等の修復、社務所の新築、境内地の諸施設の整備拡張を行い、
平成 02	1990	10 月 5 日には、御鎮座百年奉祝大祭が斎行された。鳥居は木造り、神宮より拝受。